
ネットワークレジスタンス

雑月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットワークレジスタンス

【Nコード】

N9570F

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

ネットワーク上に存在する抵抗とも呼べる有害なものたち。それらを削除するために作られたオンラインゲーム「ネットワークレジスタンス」。ゲームに関わる全ての人がネットワーク上に存在する脅威への抵抗を開始する。

第一話 製作者の言葉

第一話 製作者の言葉

まだ太陽の陽が当たらない冬の朝。

佐々木は仕事場である研究所へ向かって道を歩いていた。朝早いためか、すれ違う人は少ない。吸い込む空気は冷たくて、吐く息は白い。

研究所の門を入ると、警備室に居る警備員を見る。

「おはようございます。」

佐々木の声に警備員も応える。警備員とは毎日挨拶を交わしているためか反応が良い。佐々木はそれから建物へ向かって歩いた。

建物の入り口に書かれている名前は「情報通信技術研究所」。

ここが、佐々木の仕事場である。彼はそのまま建物内に入り、自分の研究室へと入った。

佐々木は部屋に入ると、真っ直ぐ机に向かった。彼の部屋は資料や本だらけで決して綺麗といえる状態では無い。コンピュータは机の前に一台と少し離れた所にもう一台ある。鞆やコートを脱いで机の傍に置くと、机の前にあるコンピュータを起動してサーバーにアクセスする。サーバー自体は廊下を挟んだ反対側の部屋にあり、今も誰かが予期せぬトラブルのためにくっ付いているだろう。サーバー側に届いているメールの総数を数えると五十ほどだ。メールの数を見た佐々木は頷く。数からしてまだ増強する必要は無さそうだと、扉を見た。大塚が扉を開けて入ってくる。

「佐々木君。プロジェクトの最近の動向はどうかね。」

大塚は佐々木に尋ねる。大塚は佐々木の上司であり、二人はあるプロジェクトを行っている。佐々木は大塚の前で素早くキーボードを叩いて画面に二つのグラフを表示した。

「まだユーザは少ないですが、確実に削除された数は増えています。ユーザが増えればもつと数が増えるでしょう。」

佐々木は大塚にディスプレイに表示した二つのグラフを見せる。一つは縦をユーザ数と横を日付とした赤の折れ線グラフ。もう一つは縦を削除数と横を日付とした青の折れ線グラフである。どちらもゆっくりと右上がりには上昇している。

「そうか。メインシステムは私や若い連中にまかせてくれ。君は何時も通りサポートと新種の収集を頼む。」

大塚はそれだけ言うつと部屋を出ていこうとする。その時、佐々木のコンピュータの画面に新しいウィンドウが表示された。

「ちよつと来てください。」

大塚は扉を開けて出ようとした所を引き返してくる。画面には新たなターゲットが発見された旨が表示されていた。そう簡単にはお目にかかれない画面である。

「久しぶりにターゲットが見つかったらしいです。今週中にイベントが開催できそうですね。」

佐々木は大塚を見た。大塚は画面を見て頷いている。

「よし、この情報を私のほうに送ってくれ。早速組み込もう。また何かあつた伝えてくれ。」

大塚はそれだけ言うつと部屋を出て行った。佐々木はすぐにターゲットの情報を大塚のコンピュータへ送る。

それから、佐々木はサポートプログラムから自分に回された質問内容について一通り目を通す。それぞれに返答を行い。良く質問されそうな内容についてはプログラム側に学習させた。最後に、こちら側で改善すべき点は大塚のほうに送る。

「ふう。」

椅子にもたれかかり、天井を見る。

「こんな時間に人が居るのか。」

プログラムから回された質問には質問された時刻を必ず付与している。それらの時刻を見れば中には深夜の三時や五時もある。実

際サーバー自体はずっと動いているが、そんな時間に遊んでいる人は学生だけかもしれない。

佐々木は再びディスプレイに向かうと、新種の収集を始めた。

佐々木は今ではサポートプログラムのメンテナンスと新種の収集だけであるが、元はメインシステムの構築に関わっていた。現在使用されているシステムの半分以上は大塚と佐々木が実験的に作成していたものである。

このシステムは元はネットワーク上に氾濫する有害なあるモノを削除するために作り出した。しかし、相手は佐々木たちの想像を遙かに越える量が日々生産されている。システムを一つや二つ動かしたところで何も変わらないと分かった。ならば、数百、数千のシステムが同時に複数の場所で動いたらどうなるか。そこで佐々木たちはオンラインゲームを思い付いた。このシステムをゲームとして成り立たせれば、ユーザーが増えることにシステムが増え、削除数は増えるだろう。プレイするユーザーにとっては楽しく、佐々木たちにとっては嬉しい事となる。

そこで、佐々木たちはこれまで作成したシステムを元にオンラインゲームを作成することにした。しかし、佐々木たちは技術的には理解できても「遊ぶ」という点については良く分かっていない。そこで、ゲーム業界の知り合いを探して頼み込んだり、研究所の中でもゲームに詳しい人間にはシステム構築を手伝って貰うようお願いした。彼らと一緒に既存システムを元にしたオンラインゲーム化計画が始動した。

集まった人間は、ゲーム内容の決定、ゲームシステムの構築と既存システムとの統合を行った。しかし、あくまでもメインシステムが存在する場所は各ユーザーのコンピュータの中である。そのため、複数のユーザーと一緒に遊ぶ場合は既存のオンラインゲームのようにサーバーにアクセスして遊ぶという方法は使えない。そこで、各ユーザーのコンピュータを直接繋ぐPeer to Peer（略称P2P）を使用して、サーバーを介さずにゲームをプレイ出来

るように作成した。

代わりに、サーバーにはプレイヤー同士の交流場所やゲーム内の情報の記録場所としての役割を担って貰うことにした。ゲーム内の情報にはもちろんユーザー数や削除数も含まれている。この方法ならば、大きなサーバーでなくとも大多数の人間のゲームプレイを支えられると考えた。佐々木たちはゲームでお金を稼ぐ人たちでは無いので、出来るだけサーバー数は押さえたかったのだ。

佐々木たちは研究室内のサーバーと複数コンピュータ使用して実験を繰り返した。メインのゲームシステムが完成するにつれてゲームのユーザーサポート窓口の設置も必要になった。

しかし、常にこのオンラインゲームに関われる人数が少ないためにユーザーサポート窓口には人員が回せない。そこで、ユーザーサポートの大部分をプログラムが対応することで問題を解決しようとした。大塚の案でサポート及びプログラム作成は佐々木が担当した。また、新たな新種やターゲットの発見及び報告も兼任した。これ以降佐々木はメインシステムには直接関わらなくなった。

そして、ゲームシステムとサポートプログラムが完成し、稼動が始まる。

ゲーム名は元のシステムの役割を考えた末、「ネットワークレジスタンス」という名前に決定した。これは佐々木と大塚の二人で決めた名前である。ゲームを良く知る人達からは別の名前が良いと言って幾つか候補が挙げられたが二人で全部跳ね返した。名前の意味はネットワークに存在する抵抗をネットワークに繋がっているコンピュータによる抵抗運動によって解消するというものである。多分ゲームをプレイしている人たちはわかっていないと思う。

佐々木たちはこのゲームの運営を研究目的で行っているため、このゲームは全て無料で提供された。紹介サイトも作成し、多くの人にプレイして貰おうとした。

稼動してから今に至るまで、少しずつではあるがユーザー数が増え、それに伴って削除数が増えていることが確認されている。

当初は日本語のみの対応であったが、ユーザーの要望によって英語への対応も検討されている。それに伴って他言語でのゲーム紹介サイトも作成していく予定である。

これが今現在までの佐々木たちが行っている計画の大体の内容である。

佐々木は新しく発見した新種の詳細なデータをまとめて大塚のほうに送った。

再び椅子にもたれかかり、天井を見る。真っ白な天井を見ながら、ふと佐々木は思った。

実際にゲームをプレイしているユーザーたちに教えたほうがいいのだろうか。自分達が戦っている相手が誰なのかを。

第二話 インストール

第二話 インストール

授業終了のチャイムが聞こえる。黒板に文字を書いていた先生はチャイムに気づく。

彼は生徒達に一言二言告げると教室を出ていった。

関谷は先生が出た事を確認すると、速やかに教科書類を鞆に放り込む。

「おつかれ。」

関谷は良く遊ぶ仲間たちに告げながら教室を出る。

昇降口を出ると、冷たい風が体に当たる。空を見ても太陽は見え、暗い。こういうときはさっさと帰るべきだと思った。

関谷は早足で自宅までの道を歩いた。

「ただいま。」

関谷は家に着くと、そのまま自分の部屋に入った。

机に座り、鞆から教科書をひっぱり出すと勉強を始めた。これから起こる事への対処だ。

しばらくすると、部屋のドアをノックする音が聞こえる。誰かは分かっている。だから、振り向かない。背後からドアが開く音が聞こえた。

「健一。私ちよつとお買い物行ってくるからお留守番お願いね。」

健一の母親はそれだけ言うと、ドアを閉めて部屋から離れていく。

健一は母親が十分離れた事を確認すると、椅子の背もたれによりかかる。そして、ゆっくりと息を吐いた。

健一の母親は、彼が帰宅すると何時も勉強をしているか確認に来る。

一度帰宅早々遊んでいた所を発見されて以来、遊んでいないか

確認しにくるのだ。遊んで居れば怒る。しかも、説教が長い。だから、帰宅後すぐは形だけでも勉強をする必要があった。

今ではこの状況に慣れてしまつて、集中できる時間として重宝している。

健一は明日出す宿題がもう少しで終わる事を確認すると、パソコンの電源を入れた。パソコンが起動している間に、残りの宿題を終わらせた。筆記用具や教科書類を鞆にしまつ。

健一は起動したパソコンの前に座ると、デスクトップ上に配置されたアイコンをクリックした。アイコンには「ネットワーククレジット」と書かれている。

「今日こそやるぞ。」

健一は、昨日のうちにネットワーククレジットをインストールした。このゲームをインストールしようと思った理由は、インターネット上の掲示板やウェブログでこのゲームが話題になっていたからである。

ネットワーククレジットは完全無料のオンラインゲームである。しかし、ただの無料オンラインゲームでは無い。課金アイテムなど皆無のゲームだ。課金アイテムが無いオンラインゲームなど、月額課金のオンラインゲームでも少ない。しかも、無料と呼ばれるものの多くは海外産のゲームだ。日本人が作ったオンラインゲームなどほとんど無い。いや、実際はあるかも知れ無いが、あつたとしても見つける事ができないほどの所にあるのだろう。その中で、完全な国産無料オンラインゲームなんて夢のようだ。健一はこれまで無料のオンラインゲームを幾つかしてきたが、課金アイテムにお金をつぎ込む人達の言動や無駄に作業的な戦闘に嫌気がさした。だから、このゲームを選んだ。

とあるサイトの情報では、無料でこの質は素晴らしいとか、レベル上げのための戦闘が嫌ならこれをやってみるといいよとか。そんな事がたくさん書かれていた。

そんな言葉につられて、昨日は公式ホームページにてユーザー

登録とインストーラのダウンロードをした。

しかし、健一は色々と甘くみていた。インストーラを起動すると、ゲーム本体のファイルダウンロードし始めたが、これがすぐ時間がかかった。インストール中で他の作業が出来ないこともあって、ディスプレイの前で眠ってしまったほどである。ディスプレイの電源を落として、終了するまで放置しておいた。そして、再び画面を見たときにはインストールは既に終了していて、ゲームの起動画面が映っていた。その時には、夜遅かったために明日することにした。

それから、パソコンを終了しようと思ったが、その前に念のためインストールデータの容量を確認することにした。公式ホームページに記載された動作環境一覧のHDDの容量について良く見ていなかったためである。途中で容量不足にならずにインストール出来たので、空き容量は足りているのだろう。

健一はインストールデータの容量を見て驚いた。これまで遊んだことのあるどのゲームよりも一番記憶容量を使用していた。しかも、過去一番記憶容量が多かったゲームの二倍近い。

この容量の大きさのせいでゲーム本体のダウンロードやインストールの時間がかかってしまったと言える。しかし、こんな大容量のデータを一体何に使っているのだろうか。それは昨日の時点では分からなかった。だけど、これからこのゲームを遊んでみればわかるだろう。

健一がヘッドマウントディスプレイを装着すると、そこには口グイン画面がある。そして、その背後には何処までも続く森が見える。こんな世界の中で戦うのだろうか。

そんなことを考えた健一は嬉しくなってきた。折角時間をかけてインストールしたのだ。楽しまなければ損である。

健一はマウスとキーボードを操作して登録したIDとパスワードを入力し、ログインボタンを押した。

第三話 誕生と訓練と

第三話 誕生と訓練と

健一がログインボタンを押すと、画面が四方を森に囲まれた草原に移動する。そこで、ゲーム側に新しいキャラクターを作れと言われた。男と女、どっちでも作成可能のようだ。ユーザー登録時の性別による制限は存在しないらしい。男が女キャラクターを作っても良いというのか。

「女キャラなんてやだな。」

健一は性別を男に選択した。仮に女キャラでゲームをやっても、ずっと女として遊ぶ必要がある。だったら、男らしいほうがいい。

それから男の体格、肌の色と武器を選んだ。身長の高い筋肉質の男が完成する。武器は複数あるうちから大剣を選んだ。体格の良い男には大きな剣かハンマーと決まっている。それに、昔読んだ漫画にも大剣を振り回すかっこいい男が居た。片手剣や弓などと言うものは女キャラクターに任せておけばいい。

名前はケンにした。名前の一部という安易な命名だが、後悔しなければそれでいい。

決定ボタンを押すと設定された項目一覧が表示される。軽く目を通すと決定ボタンを押した。

すると、画面が変わりどこか家の中に移る。キャラクター設定後に移動した場所なので、多分プレイヤー専用の部屋なのだろう。周りを見回しても何も無い。これから引越す部屋を下見しているような気分だ。

作成したキャラクターを見ると、先ほど選択した武器は持っている。ひとまず、出入り口から外に出てみよう。

ドアを開いて外に出ると、少し処理が遅くなった。ケン以外の沢山のプレイヤーが画面内に出現したからだ。目の前に広場がある。

その中を沢山のプレイヤーが走り回っている。

広場を歩き回るためにキャラを動かそうとすると動かない事に気が付く。

「あれ。」

すると、前から老人が歩いてきた。

「おぬしは、わしらと共に戦いたいのか。ならば、おぬしの力を見せて貰う事にしよう。準備が出来次第ゲート前に居る門番に話しかけるが良い。」

老人はそれだけ言うた。オンラインゲームで良くある本番前の訓練らしい。特にする事も無いので早速ゲートへ向かう事にした。しかし、初めてなので土地感覚が全くない。なので、全体マップを見て目的地を探す。目的地を見つけると、すぐに動き出した。

通り過ぎるプレイヤーが身に付けている服はどれも異なり、かつこよく見える。あんな服を着る日が来るのだろうか。

ゲートの門番に話しかけると、早速訓練が始まる。画面が変わり、小さな村の前に転送された。

「なんだ、ここ。」

村は荒れていて、人が住んでいるようには見えない。村の中を歩くと、何処からか鳴き声が聞こえる。聞こえる方を向けば、三頭のライオンのようなモンスターが居る。

「相手はあいつらか。」

ケンは剣に手をかける。すると、獲物を見つけたライオンがケンに向かって走ってきた。

「やってやんぜ。」

ケンもライオンへ向かって走り出した。ライオンは一定距離まで近づくと、ケン目掛けて飛びかかってきた。タイミングを計って剣を振る。最初に襲いかかってきたライオンの顔面に直撃する。攻撃を受けたライオンはその場に倒れた。そこへ次のライオンが横から襲ってくる。その攻撃に対応できずに引っ掻かれてしまう。なん

とか離れると、勢いに任せて剣で突いた。見事に刺さるが、血らしきものは見えない。未だ無傷の一頭は一定距離をとってこちらを見ている。そちらに注意を向けながら、起き上がるうとする二頭に再度剣を振る。二頭が動かなくなるのとほぼ同時に無傷の一頭が襲ってきた。剣を振るうにも振り切った直後なので、なんとか攻撃を交わすだけとなった。再び一頭とにらみ合う。ケンは剣を構えた。

ライオンがこちらに向かって走ってくる。ケンはそれと同時にライオンに向かって走った。ぶつかる直前でライオンに向けて剣を振る。振り切るとすぐにライオンを見た。ライオンは倒れていて、今立ち上がるうとしている所であった。ケンはそこに追い討ちをかけた。

ケンは動かなくなった三頭と周りを見た。

「これで終わりかな。少ないな。」

訓練終了ならば、ここで終了の告げるウィンドウなどが表示される。もしくは画面が変わるだろう。しかし、変化は見られない。

剣をしまうと、再び村の中を歩いた。訓練用のフィールドのためか、外部への通路は大きな門で閉ざされている。

少し歩くと、突然開けた場所にでた。しかし、何も無い。それ故に嫌な予感がする。

開けた場所の中心に向かって歩くと、突然空からモンスターが振ってきた。モンスターと地面がぶつかる音、地面が揺れる感覚。健一は思わず声を漏らす。反射的に剣に手をかけた。

先ほどのライオンをそのまま大きくしたモンスターのようだ。

ケんに咆哮を浴びせてくる。

大きなライオンは前足を用いて、ケンに攻撃を仕掛けてきた。

ケンは距離を取って隙をうかがう。すると、ライオンはケンに向かって突進してきた。

ケンがその突進をかわすと、すぐに大きなライオンを見る。ライオンはすぐにこちらを向くわけではなく、ゆっくりとこちらに向いた。ここは攻撃すべきタイミングのようだ。

ケンは大きなライオンと距離を保ちながら、次の行動を待った。すると、大きなライオンは両前足を上げて地面に叩きつけた。

直後地面が大きく揺れる。立っているのもやっとな状態だ。揺れが収まる前に、ライオンはケンに突進してきた。動かない標的のためが見事にぶつかり、後方に飛ばされる。地面に落ちると勢いが収まるまで地面を転がった。

「くふ。やさしくないな。」

ケンは立ち上がると、ライオンの様子を見た。今よりも少し離れる。

大きなライオンは再度地震を起こす。しかし、今度は自分が居る地面が揺れていない。それに、自由に動ける。ライオンを見ると、先ほどよりも離れていることがわかった。離れば地震の影響も無いのかもしれない。これなら直後に攻撃できそうだ。

大きなライオンがまた突進してきた。パターンはもう出尽くしたのかもしれない。ケンはかわすと、ライオンの背中に向けて剣を振り下ろす。衝撃でライオンの体が揺れた。すぐに剣をしまつて離れる。狭い範囲ならば剣を出したままでもいいが、広範囲を移動するには邪魔になる。

それから、突進と地震の直後に出来た隙を使ってライオンに三度ほど攻撃を加えた。すると、動きが鈍くなり攻撃も当てやすくなる。そして、さらに二度攻撃を加えるとその場に倒れる。そして、一度大きな鳴き声を発すると動かなくなった。

すると、画面に訓練が終了した事が表示された。これで終わらしい。

「これで訓練なのかよ。」

相手は少ないものの、ボス級と思われるモンスターが居たために、アクション初心者にこの面は辛いと思う。それとも、大剣を選んだからこのモンスターたちだったのだろうか。どちらにせよ、さすが無料なのかもしれない。

数十秒後に画面は変わり、自分の部屋に戻った。やはり何も無

い。特に部屋の中でする事はないので外にでた。すると、訓練させた老人が目の前に居た。

「おぬしの力を見せて貰ったよ。なかなかの腕だ。わしらと共に、この町に被害を与えるモンスターたちを倒してもらいたい。」

そこで老人の頭の上で1000Pという文字が浮かんで消えた。「この町で使えるお金を少しあげよう。これで必要なものを揃えるといい。店の場所は地図に載せておく。準備が出来たら、ゲート前に居る門番に話しかけるが良い。」

そして、老人は体を反転させて何処かへ向かって歩き出した。しかし、すぐに立ち止まりこちらを向く。

「言い忘れていたよ。お金はモンスターを倒せばその都度貰える。頑張りなさい。」

老人はそれだけ言うとは何処かへ行ってしまった。

空を見ると、日が傾き始めていた。

第四話 初陣

第四話 初陣

ケンが動けるようになると、早速手に入れたお金を元に必要なものを買う事にした。

地図に従って店を回っていく。武器屋、防具屋、雑貨屋、薬屋と家具屋があることがわかった。家具屋については購入することで部屋に配置できるのだらう。今はそんな余裕は無いのでそれ以外の店を順に見ていった。

まずは武器屋だ。ここでは武器の購入、強化や武器のグラフィック変更が出来るらしい。武器一覧を見ると購入出来る武器は無い名前の後ろにはレベル1や2といった記述があり、レベルが上がれば使えるのではないかと思う。レベル1すら購入可能になっていない。つまり、今持っている武器はそれ以下だということだ。戦闘を重ねればレベルの付いた武器も使えるようになるのだろうか。

防具屋でも武器屋と同様にレベルの付いた防具が置かれている。やはりこちらも今のレベルでは購入する事が出来ない。では、このお金は何処で使えというのか。

雑貨屋に寄れば、指輪や腕輪、ネックレスといったものがある。どれもお金さえあれば購入可能のようだ。それぞれ攻撃力、防御力や体力が上がるといふ説明がある。

体力については自分のものを見ると、初めから沢山ある。その量からこれ以上増えないのでは無いかと思ってしまうほどである。そういえば、レベルに関係無く体力の量が同じゲームが何処かにあったような気がする。だけどタイトルが思い出せないのはいいだらう。

値段ごとに効果の程度が違うのでちょっとずつ買い変えて行くようだ。とりあえず今のお金で買える腕輪を購入。攻撃が最大の防

御とは言つもののあまりに防御力が無ければその言葉も通用しないと思う。

早速装着してみると、防御に関する数値が少し上がる。あとは腕輪を着けたのでキャラクターのグラフィックが少し変化した。

他のものも買ったかったが、既に貰ったお金の半分以上を使っているためにこのままでは薬屋なんて行けなくなる。なので、時には我慢も必要だと自分に言い聞かせた。

薬屋へ行くと一瞥で沢山の薬が置かれている。体力回復から一時的な攻撃力などの能力アップ薬が並んでいた。その他に戦闘不能からの回復薬やフィールドからの脱出アイテムが売っていた。脱出アイテムの値段は今回貰ったお金の四分の一だったため止めておいた。

ケンはずりあえず一番安い回復薬を残りのお金ぎりぎりまで買い込んだ。

そのままゲートへ向かい門番に話しかける。訓練時とは違う会話となり、会話が終わるとそのまま画面が変わった。門番からはフィールドからの帰還方法を教えられた。

フィールドから出てこちらに戻る方法は脱出アイテムを使う、今居るフィールドからモンスターに見つからずに出る、モンスターに倒されるのどれかである。今回は脱出アイテムを持って居ないのでなんとか別のフィールドに向かわないといけないようだ。

そして、見慣れた場所に転送される。訓練時同様こちらが転送先を選択することは出来ないようだ。

「ここは。」

ケンは辺りを見回す。そう、ここはログイン時やキャラクター作成時に背景として登場したフィールドだ。ケンは森に囲まれた円形の草原に、ただ一人立っている。周りの森を良く見ると何本かの道が伸びている。これらの道が何処へ繋がっているかは分からないが、森以外のフィールドに繋がっているものもあるだろう。森だけではなく戦闘エリアが無いなんてゲームとしては問題ありだ。

ケンは体を一回転すると、複数ある道の一つを選んで歩き出した。

道は舗装されているわけでは無く、所々に大きな石が転がっていて通行の邪魔をする。

ケンはそのまま草原を抜けて森の中に入った。

何処からか鳥の鳴き声が聞こえてくる。音でどの辺りから聴こえてくるかはわかったが、気にせず前に進んだ。

すると、大きなねずみの集団に出くわす。

その姿にケンは小さく悲鳴を上げる。一匹の大きさは良く見るねずみの三倍はあるだろう。一匹のねずみが赤い目をこちらに向けてる。悲鳴に気が付いたのだ。

逃げても仕方が無いので、ケンは剣に手をかけた。

ねずみ達が一斉にケンに向かってくる。ケンはねずみ達を十分に引き寄せると、自前の剣を大きく振った。

振っている最中にもねずみはケンに襲いかかり、それを払うように無理矢理剣を振る。

それでも攻撃を仕掛けるねずみたちを振り払いながら一匹ずつ仕留めていく。すると、その都度ねずみの上にはポイントが表示されていく。これがその敵を倒した報酬らしい。

最後の一匹が動かなくなったとき、ケンも攻撃を受けて体力が少なくなっていた。とは言っても、ほんの少しである。

早速購入した回復薬を使ってみる。すると体が光りだし、体力が回復した。

ケンが再度ねずみたちを見ると跡形もなく消えていた。剣をしまうと再び道を歩き出す。

すると、小さな川を見つける。川の反対側に道が続いているのが見えた。浅いのでそのまま渡って反対側に行けそうだ。そう思いつつ川に入ろうとすると、反対側の森の中を何かが動いている事が確認出来た。しかし、何かは分からない。黒くて大きな何かである。葉を揺らす音だけがこちらに聴こえてくる。

しかし、それ以外の音がどこからか聞こえてきた。

「健一。ご飯よ。早くいらっしやい」

母親の声だ。しかし、どうする。このままではすぐに行けない。「もうちょっと待って。」

健一が大声で言うと、母親は早くしなさいと言いながらドアを閉めた。

ケンは見えない敵に注意を向けながら、別の場所から反対側に渡った。

反対側に渡ると、さらに葉を揺らす音が近くなったと感じた。葉の音から複数では無く単体のようだ。複数では無い事はありがたいが、今はさっさと逃げるべきだ。それに、別の方向からも動物の鳴き声が聴こえる。

ケンは周りから聴こえてくる葉を揺らす音や動物の鳴き声に注意を向けながらフィールドの出口を探した。

相手が何処に居るのか、何時見つかるかわからない。健一は自分の息が荒くなっていることを感じながらも、気にせずケンを動かしした。

すると、虹色に光洞窟のような入り口を見つける。

「まさか、ここが出口か。」

ケンは辺りを注意深く見るとその中へ入った。

入ると、目の前には洞窟の出口が見える。その先には海があり島がある。後ろを見れば先ほど居た森が見えた。

そこで、広場に戻るか否かの選択を迫られる。夕食もあるので帰還を選択する。

すると、世界が真っ白になり、次の瞬間にはケンの部屋に戻っていた。全く何も無い部屋だ。

ケンはそのままメニューからゲーム終了を選択し、ゲームを終了した。デスクトップ画面に戻ると、ディスプレイの電源を落とした。

健一は電源が落ちた事を確認すると、夕食を食べに部屋を出た。

一階に向かうと、既に夕食は出来ていて、母親はテーブルにあるおかずを食べていた。

「遅いから先に食べてたわ。早く食べちゃってよ。」

健一は母親の言葉に何度か頷くと椅子に座って夕食をとった。

今日は母親と二人だけだ。父親は仕事で遅いらしい。

健一は出てきたものを早々に平らげた。

「ごちそうさま。」

健一は席を立ち、汚れた食器を台所に置く。それから二階へと戻ろうとすると母親が話しかけてきた。

「遊びも良いけど。勉強もすっかりしなさいね。」

健一は母親の言葉に応えようと、自分の部屋に戻った。椅子に座り、ディスプレイの電源を入れる。そして、「ネットワークレジスタンス」を起動した。

健一は再び母親が部屋を訪れるまで、ゲームをし続けた。

第五話 遭遇

第五話 遭遇

突如鳴り響く目覚まし時計の音。健一は布団から這い出るとスイツチを切った。唸りながらも起き上がる。

「おはよう。昨日は何時まで起きてたの。」

身支度をして一階に下りれば母親が聞いてくる。彼女は台所で食器を洗っているところだ。

「十二時には寝たよ。多分。」

健一はテーブルの傍に鞆を置くと椅子に座った。

目の前には野菜とハムを挟んだパンが二つある。健一は一つを取って口に入れた。

「勉強のほうは大丈夫なの。来年は受験なんだから、勉強もしつかりしなきゃ駄目よ。」

健一は無言で何度か頷く。しかし、重要であるとは認識していない。

「ごちそうさま。」

食後に歯を磨くと、鞆を持って家を出た。学校に着き、教室に入る。

「関谷、おはよう。」

既に来ていたクラスメイトが声をかける。健一はそれに応えながら自分の席に着いた。

今日もまた何時ものように知識を詰め込む時間が来る。

最後の授業終了のチャイムとともに、クラスメイト全員がそれぞれ動き出す。帰りの支度をしたり友達と喋りだしたりだ。

健一は佐藤の所に行った。彼は健一と同じく「ネットワークレ

ジスタンス」で遊んでいる人間だ。

健一が始めるきっかけの一つが彼であると言えるだろう。誘えば一緒に遊べるかもしれない。

「武器と防具どっちもレベル1なのかよ。」

健一の言葉に驚く佐藤。そして、首を横に振る。

「俺とレベルが違いすぎる。悪いが俺と同じレベルになつてからにしてくれ。」

彼のレベルは4。健一と3レベル差だ。差が有りすぎるのは良く無いのだろう。実際他のゲームでもそのぐらいの差があると一緒に遊ぼうとは思わないだろう。

「そういえば、青山が最近始めたとか言ってたな……って居ないや。」

佐藤が教室内を見渡すも青山を発見出来ない。

「まあ、あいつは一人でやりたいとか言ってたからな。話しかけるぐらいはしてみたらどうだ。」

健一は佐藤の言葉に比べると、帰りの支度をして帰路へ着いた。帰宅すれば何時ものように母親対策に勉強を済ませる。

そして、そのままパソコンを起動して「ネットワークレジスタンス」を始めた。

ログインした先は昨日と同じ生活観の無い部屋。

昨日はなんとかレベル1の武器と防具の購入が可能になり、少ない資金を使って買い揃えた。その時、初めに貰ったお金を残しておけば良かったと思つたがもう遅い。

ケンはず分の部屋を出て門番の所に向かった。

レベル1の武器と防具が購入可能になつたのは何故だかわからない。帰還時に購入可能であると言われた。どんな基準なのだろうか。倒した敵の数が、手に入れたお金の総額か。

何が作用しているか分からないが、とにかくレベル1の武器と防具が購入可能になつたということだ。それだけだ。これで最低ラインを越えたのだろうか。

門番に話しかけると何時もの場所に転送される。周りを森に囲まれた草原だ。

何度も転送されているが、必ずこの場所に転送される。しかし、このフィールドから出た他のフィールドは毎回違う。多分、ここが自分のスタート地点なのだろう。このスタート地点を変える事は出来ないのだろうか。しかし、設定画面にそのような項目は無い。なぜ、何時もここからなのだろう。

真ん中に立って居ても面白く無いので一つの道を選んで歩き出した。そして、森に入る。

昨日遭遇したねずみを含む小さなモンスターがケンの行く手を阻んでいくが、一匹ずつ確実に攻撃を与えて倒していった。

すると、目の前に自分の身長以上の段差がある。段差を登って見るとまだ進めることがわかった。段差を越えて先に進む。

すると、目の前にフィールドの出口が見えた。

「なんだ。今日は早く見つけ……。」

ケンが出口を中心に周りを見渡すとある位置で動きが止まった。そこに居たのは大きな狼男だ。しきりに左右を見ているがこちらには気が付いていない。

倒すか、倒さずに逃げるか。ケンはそう考えながらゆっくりと出口へ向かって動く。

その答えはすぐに出た。ケンが声を発してしまったからだ。これは健一の操作ミスである。

呼び声とともにケンのほうを向く狼男。口から見える牙が恐ろしい。

見つかったでは仕方が無いので、ケンは狼男に向かっていった。

そのままの勢いで剣を振り下ろす。鈍い音と共に狼男が後退する。その狼男にケンが再度剣を振ろうとする。しかし、その前に狼男の腕がケンに伸びてきた。そのままケンの体を引っ掻く。攻撃を受けた事により、ケンの攻撃が取り消される。

ケンは剣をしまつて狼男から離れた。しかし、すぐ狼男は突進

してくる。避けきれずに弾かれ地面を転がった。

ケンはずつくりと立ち上がる。目の前には狼男が待ち構えている。狼男はケンが立ち上がるとすぐに体を掴み持ち上げた。

ケンはもう体力が少ない。このままではそのまま部屋に戻されてしまうのでは無いかと思った。

その時、狼男の背中に細いものが刺さった。

狼男は小さく悲鳴を上げるとケンを掴んだまま細いものが飛んできたほうに向いた。

そこには弓を構えた少女が居る。狼男はケンを地面に捨てると弓を持つ少女へと向かって行った。

弓を持つ少女は狼男の周りをぐるぐると回りながら隙を見ては弓を引いている。

しかし、この状況。ケンにとってはよろしく無い。女に助けて貰うなんてどうだろうか。

ケンは立ち上がると。ちょうど背中を向いた狼男へ向かって走った。

「負けてばかりじゃ嫌なんだよ。」

走った勢いそのままに狼男へ剣を振り下ろした。

狼男はそのまま地面に倒れ、ポイントが表示される。そして、すぐに消えてしまった。

「倒したのか。」

ケンはその場に座り込む。そして、すぐに回復薬で体力を回復した。回復薬までも残り少ない。

「大丈夫。」

ケンがその声に見上げれば、さっきの弓を持つ少女だ。いや、それ以外にこのタイミングで話しかけてくるプレイヤーは居ない。

近づいてわかったが、彼女の髪型はおかっぱのように揃えて切られている。髪色はブロンドで体を動かすたびに髪が揺れる。なかなかの再現度だ。感嘆の声をあげたいところだが状況がそれを拒む。

「大丈夫だよ。ありがとう。」

ケンは本心を押さえつつ礼を言う。そして、立ち上がった。
「君弱いね。でもレベル2なんでしょ。」

ケンは君弱いね発言に少々いらつとしたが、この状況では不利なので押さえた。

「いや、俺はレベル1だけど。」

ケンの言葉に弓を持つ少女は驚いている。何故そんなに驚くのだろう。

「あ、自己紹介がまだだったわね。私はさくら。あなたは。」

「ケンだよ。そういえば、なんでレベル1って言ったら驚いたの。」

さくらは名前を聞くと何度が頷く。

「さっきのはレベル2以上じゃないと出ないモンスターなの。だから、てつきりあなたがレベル2かと。」

驚くケンをよそにさくらは話を続ける。

「そういえば、このフィールドってあなたのものなの。」

さくらはそう言いながら辺りを見回す。

「あなたのものって、自分のフィールドがあるのか。」

ケンも釣られて周りを見る。とは言っても、木が沢山あるだけだ。

「ああ、知らないんだ。広場から転送された先が自分のフィールドだよ。何時も同じなの。あなたが広場から転送されたフィールドってここじゃないの。」

ケンはさくらの言葉によって理解出来た。やはり、ここが自分のフィールドでありスタート地点らしい。

「確かにここだよ。なら、ここが自分のフィールドだね。」

さくらはやっぱりという様子だ。ケンは彼女が先ほどから上から目線で見ているように思えた。さくらのほうがレベルが上だから仕方が無いのだろうか。

「それじゃあ。私はこれで。」

さくらはフィールドの出口へ向かって歩き出す。

「あ、あの。」

ケンは歩き出すさくらを呼び止めようとする。この場で呼び止めておかないともう二度と会えないと思った。実際、インターネット上で一度会った相手と再び会うなんてそうは無い。

「あつ。」

さくらはケンの言葉が聞こえたのか立ち止まる。いや、ただ何かを思い出しただけなのかもしれない。

そして、彼女は笑顔で振り向いた。

「折角会ったんだから、私とパーティ組んでみる。」

さくらの笑顔。ケンはそれがコンピュータで作られたものだとわかっていても可愛く見えた。

「うん。じゃあ、パーティ組もう。初めてだけど。」

ケンは恥ずかしくなりながらもさくらの傍に走り寄る。

さくらという名の弓使いの少女。初めてのパーティ。

ゲームが楽しくなりそうだ。

第六話 弓使いの少女

第六話 弓使いの少女

さくらは広場から自分のフィールドに転送された。

波の音が聞こえる海辺。ここは周りを海に囲まれた島。太陽が元気良く照らしている。

コンピュータで作られたニセモノだから暑くは無い。本物だったらこのまま海に飛び込みたいくらいである。

ここから他のフィールドへの移動手段は橋だけ。しかも、不自然に海の上にある出口へと橋が伸びている。

このフィールドはカニや魚が変形したような生物が辺りを徘徊している。さすが海だと思う。

プレイヤーが移動できる範囲が狭いために、モンスターは海から突然出現する形になっている。そのため、モンスターが出現しても発見されなければ無駄な戦闘は起きない。

この手法、人を選びそうだ。しかし、アップデートでこのフィールドに変更が加えられていないという事は受け入れられているという事なのかもしれない。

適度に配置された岩が隠れ場所となり、出現したモンスターの視線から逃れる事が出来る。

今も全身に光沢を持った半魚人が砂浜に上がってきた。さくらはすぐに近くの岩に隠れる。

他のプレイヤーなら突進していても良いだろう。しかし、さくらの武器は弓だ。面と向かって戦っていたら負ける。離れた距離から少しずつ攻撃を与えて倒したほうが良い。

岩陰に隠れながら、彼女とは違う方向を向く半魚人へと弓を引き狙いを定める。

矢を放つと、勢い良く半魚人へと飛んでいく。さくらは自らの

手から離れた矢を目で追いつつ岩の陰に隠れた。

矢は半魚人に見事に当たり、低いうめき声が聴こえた。

半魚人はすぐに辺りを見回す。そして、矢が飛んできたほうへ歩き出した。

その間にさくらは新しい矢をつがえ、岩の反対側から再度半魚人へ向かって弓を引く。素早く狙いを定めると矢を放った。しかし、移動した先が今居る岩の反対側である。そのため、矢はあたったもののこちらの姿が見られてしまった。新たな攻撃にうめく姿を横目に走り出す。

目標を捉えた半魚人はさくらに向かって走り出した。

さくらは走りながらも弓に新たな矢をつがえる。少し引いた状態にして背後を見た。半魚人の移動速度はさくらほど早くは無い。走れば走るほど差が出る。武器が軽いから速いのかも知れない。

さくらは立ち止まり、少し引いておいた弓を一気に引く。そして、半魚人に狙いを定め、矢を放った。さくらの手を離れた矢は勢い良く飛んでいく。そして、半魚人の体に刺さった。低いうめき声とともに反動で立ち止まる。しかし、すぐにさくらに向かって走り出した。

さくらはすぐに新しい矢をつがえると近くにあった岩に向かって走る。隠れるためには無い。一瞬でも半魚人の視界から逃れればいいのだ。

さくらは岩に隠れると、すぐに半魚人を見た。相手はこっちの場所が分かっている。ゆえにまっすぐこちらに向かってきている。

そろそろ良いだろうか。さくらは大きく息を吸い込むとゆっくり吐いた。息を吐き終わるとすぐに岩の反対側に向かう。そこから半魚人を見た。半魚人はさくらが先ほど居た場所に向かって走り続け、岩に隠れて見えなくなった。

半魚人が岩に隠れて見えなくなると、さくらはすぐに半魚人の背後を取るように岩伝いに移動する。

さくらは岩に張り付き、先ほど自分が居た場所を見た。

案の定、半魚人はその場で辺りを見回している。さくらを完全に見失ったようだ。

さくらは岩から離れて、わざと半魚人に見える位置に移動する。そして、弓を思いつきり引いて、半魚人に狙いを定めた。

「あなたの負けよ。」

さくらは矢を放つ。半魚人は声に気が付いて、振りかえようとするが時既に遅し。さくらが放った矢が見事に命中すると、半魚人はうめき声を上げながらその場に倒れた。半魚人の上にポイントが表示される。

さくらは一呼吸おくと周りを見た。モンスターばかり見ているので気が付かなかったが、ここからフィールドの出口までそれほど距離は無い。

さくらはフィールドの出口に向かって走った。途中で小型のモンスターが幾らか出現したが、特に足止めされることも無く倒れていた。

さくらは周囲にモンスターが居ない事を確認すると、島と出口の間に架けられた橋を渡る。橋が木製であるため、橋に足がつく度に軽い音が聞こえてきた。

さくらがフィールドから出ると暗い洞窟の中で広場に戻るかどうかの選択を迫られる。さくらは否と選択しウィンドウを消した。一度選択を否としても、洞窟内に居ればメニューから何時でも広場に戻れる。

さくらは次のフィールドが見えるように洞窟の奥へ進んでいた。

すると、フィールドの出口付近で今まさにモンスターと戦闘をしているプレイヤーを発見した。相手は狼男らしい。ということはここはレベル2以上のフィールドなのか。

相手のプレイヤーは狼男に一撃を与えるも、すぐに攻撃を受けてしまう。

プレイヤーは狼男から逃げるように離れるが、すぐに追いつか

れ攻撃されている。

「なんて、かつこ悪いんでしょ。」

さくらはすぐに洞窟を抜けて次のフィールドへ入った。

狼男と戦っていた男はケン。戦士で大剣を持っている。しかし、レベル1。

さくらは狼男を倒した後、その場から立ち去ろうとした。しかし、歩き出すと、すぐに面白い事を思い付いてしまう。

ケンとパーティを組めば、弱い男キャラを助ける女キャラになれる。男キャラからして女キャラに助けられるのはどうかと思う。さくらにとつての理由はそのようなものである。

結果、さくらの提案にケンが応じたためパーティを組む事になった。

そして、二人は森を抜けて、別のフィールドの出口へ入った。

「帰還しないでよね。」

モンスターに見つからずに洞窟に入ると必ず帰還するかどうか聞いてくる。パーティを組んでもそれぞれに聞いてくる。ちなみに、パーティの誰かが帰還とした場合はその人だけ帰還するという仕様になっている。この辺りは改善して欲しいが、パーティは存在してもその中にリーダーという役割は存在しないため仕方ないとも思える。ようはパーティを組むときにリーダーを決められるようにすれば良いだけだったりする。

さくらは広場に戻るか否かについてのウインドウを消すと、次のフィールドへの入り口付近へ向かって歩いた。ケンはさくらの後ろから付いてきている。

次のフィールドは沼地だ。地面が他のフィールドよりも柔らかく動きづらい。こんなフィールドに割り当てられたプレイヤーを少し気の毒に思う。

さくらは新たなフィールドへ入った。遅れてケンもフィールド

に入る。

辺りは霧がかかっているためか視界が悪い。一步進むにも地面に沈んだ足を引きぬくため、他のフィールドよりも移動速度が遅くなる。

所々に出来た水溜りと枯れた木が幾つかあるだけだ。周りは身長の上の岩で囲まれている。

「とりあえず。行きましよう。」

さくらは沼地の奥へ向かって走り出した。ケンもその後を追って走り出そうとする。

「ちよつと待つて。あれ。」

さくらはケンの言葉に立ち止まり彼を見る。彼はさくらの前に立ち剣に手をかけた。彼が見る先、霧の中にうっすらとモンスターの姿が見える。こちらには向いておらず、さくらたちから見て左に向かつて動いている。

さくらは新しい矢をつがえると、弓を引く。そして、未だ全体像の見えない霧の中のモンスターへ狙いを定めた。

そこで、ケンはモンスターに向かつて歩き始めた。来ないならこつちから行こうという考えなのか。

「ちよつと待つて。」

さくらの言葉にケンは立ち止まり彼女を見る。その奥、霧の中から猛スピードでこちらに向かつてくるモンスターが見えた。

霧から出てきたモンスターは茶色い猪だ。

「来たよ。」

さくらは狙いを定めると、矢を放った。矢はこちらに向かつてくる猪に当たる。しかし、勢いは止まらず二人に突進してきた。

さくらは素早く避ける。弓使いにガードなんて無い、避けるしかないのだ。

さくらは猪を避けると、すぐに矢をつがえ弓を引き狙いを定めた。

ケンは猪に剣を振るも、猪への対応が遅れた。そのため、十分

に剣を振る事が出来ず、猪の突進の力で背後に飛ばされてしまう。
一瞬の空中滞在の後、水分を多く含んだ土の上に投げ出された。

猪はケンが居た後ろ、ちょうどさくらが居た所で停止する。

さくらは停止した猪へと矢を放つ。ここで何もしなければ、猪は倒れたケンに向かって再度突進を開始するだろう。それはケンにとってもさくらにとっても避けたい事だ。猪は矢が当たるとすぐにさくらのほうを向き突進を始めた。さくらは余裕を持って突進を避ける。猪から十分離れると弓を引き、停止した猪へと矢を放った。ゆっくりとさくらのほうへ向き直る猪。そこへケンは猪の背後から剣を振り下ろした。

衝撃で猪の体は揺れ、そのまま地面に倒れる。二、三度体を揺らすと動かなくなった。猪の上にポイントが二回表示される。

「倒したわね。」

さくらはケンの傍に走り寄る。その間に猪は消えてしまった。

「なんで二回ポイントが表示されたんだ。」

ケンは今先ほどまで猪が居た地面を見つめながら言った。

「パーティを組んだからね。パーティの場合はポイントが均等に配分されるの。」

さくらは霧のかかった何も見えない所へ目をやる。

「もつと奥のほうへと行ってみましょう。」

さくらの言葉にケンは頷き、さくらとともに歩き出した。

奥に進むと蜂のような昆虫が近寄ってきて、二人の邪魔をする。

「邪魔なんだよ。」

ケンは我慢の限界を突破したらしく、大剣を蜂に向かって振っている。しかし、剣自体が大きいためになかなか当たらず逆に集中攻撃を受けてしまっている。

さくらは自分に近づいてきた蜂に対処しつつ蜂に苦戦するケンを見て笑った。武器にもそれぞれ長所と短所がある。長所を伸ばし短所を補わないと一人で戦うには大変かもしれない。

そこで、ゲーム外から声がする。

「晶。ご飯にするから下りてらっしゃい。」

声は母親のものようだ。そうか、現実世界の時間なんて気にしてなかった。

ヘッドマウントディスプレイを装着しているためか外部が見えない。母親の声がしたあたりを向く。

「もうちよつと待って。今行くから。」

晶の後に、母親の声がしたが聞き取れなかった。ドアを閉めた事を耳で確認すると、ゲームに戻った。

「どうしたの。動かないけど。」

ケン は心配そうにさくらを見ている。

「そろそろゲームを止めないといけないの。」

さくらはケンにそう言いつつ辺りを見回す。近くにフィールドの出口があれば助かる。しかし、見える範囲に出口は存在しない。さくらは脱出アイテムを一応持っている。しかし、ここで抜けるとあとに残ったケンが可愛そうだと思った。それに、脱出アイテムがもつたいない。

「そっか。じゃあ、早く出口を探さないとね。とりあえずあっちに行ってみようよ。」

ケン は一人で歩き出す。さくらはその後を追って歩き出した。

しかし、出口はあるはずなのになかなか見つからない。動き回っているためか、何度かモンスターと戦闘をすることとなってしまった。

ケン は岩の壁に背中を預けて空を見上げた。

「駄目だなあ。これだったら来た道を戻ればよかった。」

「そうね。そうすれば……。」

さくらがふと辺りを見ると、霧にかかっているがフィールドの出口が見えた。

「見つけた。あそこ。」

さくらは見つけた出口を指差す。ケンも指し示す方向を見て理解した。

「よし、早く行こう。」

ケンはず速出口に向かって走り出す。ここで見つかったらどうするんだろつか。倒すのか。

近づくにつれて霧が薄れフィールドの出口であることが再認識された。それとともに、出口直前に十字路があることがわかった。左右にモンスターが居るかもしれない。迂闊に走りぬける行為は出来そうも無い。

ケンも理解したようで、十字路に近づくと、ゆっくりと辺りに注意を払いながら歩いた。

十字路に着くと、道の片方の岩の壁に体をくっつけ、ケンが角から覗きこむ。

「何も居ない。こっちは大丈夫だ。」

ケンは顔を戻すと反対側の岩の壁へと向かった。

再びケンが角から覗きこむ。すると、すぐに首を引っ込めた。

「居る。しかもとびつきりでつかいトカゲだ。」

ケンは再び角から覗いている。

「本当に。」

さくらは信じられないという気持ちのままケンと位置を交換して角から覗いた。するとすぐに顔を引っ込める。

「本当に居るわね。しかも大きい。」

さくらは再度角から大きなトカゲを見る。見ている限りではこちらを向いている時は無い。横を見ているか。さくらたちに背中を向けているだけだ。だとしたら通り抜ける方法はある。

さくらは顔を引っ込めるとケンを見た。

「ケン。あいつが背中を見せたら向こうまで走って。」

さくらはフィールドの出口を指差す。

「ええ。やだよ、そんなの。」

ケンは本当に嫌なようだ。目の前に出口がある。そして、さくらには時間が無い。それならば、了解せざるをえない状態に持ち込もう。

「じゃあ、私だけここで脱出アイテム使用で帰還するか、一緒に出口で帰還するか今すぐ決めて。」

さくらはケンに二択を迫る。さくらにとってはどちらでも良い。彼が一人でこのフィールドを抜けられるのならばである。

「うっ。ずるいよ、それ。」

ケンは嫌そうにさくらを見る。彼の言葉から脱出アイテムは持っていないようだ。

「じゃあ、よろしく。」

さくらの言葉に押されて、ケンは角からトカゲが居るほうを恐る恐る見る。

それから、十秒もしないうちにケンは走り出した。出口側の壁に張り付いて角からトカゲを見ている。さくらも角からトカゲを見たが、見つかつては居ないようだ。

さくらもトカゲが背中を向けた時を狙って走った。そのままケンの居る場所に突っ込む。

さくらは壁に張り付くと動かなくなった。ゲームでこんなに緊張するなんて久しぶりだ。

ケンはさくらが出口側に到達した事を確認すると、角からトカゲを見た。一度頷くと顔を引っ込める。

「よかった。見つかつて無いよ。」

さくらはケンの言葉に大きく頷く。さくら自身も見つからずに通る事が出来るのか分からずに恐かった。

「フィールドから出ましよう。あとはそれから。」

さくらとケンはフィールドを出て二つのフィールドを繋ぐ洞窟へと入る。すぐに帰還するか否かの選択ウィンドウが表示されるが否として消した。ケンも同様に否と選択したようだ。まだ、パーティを解散していない。

「じゃあ、ここで解散しましょう。私がするね。」

さくらはメニューからパーティの解散を選択する。すぐに解散した事がウィンドウに表示された。

「じゃあ、お疲れ。」

ケンはそのただけ言うのと次のフィールドへ向かって走り出した。彼はまだ続けるようだ。

さくらはその後姿を見て、ある事を思いだした。

「ねえ、ちよつと待って。」

さくらの声にケンは立ち止まり振りかえる。

「折角だから友達登録しておかない。そうすれば時間が合ったときにまた一緒にフィールドを回れるから。」

友達登録をしておけばお互いがログインしているかどうかわかる。また会ったときに一緒に遊ぶ事が出来るだろう。

ケンはさくらの所に駆け寄る。

「友達登録ってどうするの。」

さくらの指示でお互いが相手を友達として登録する。

「ありがとう。お疲れ様。」

ケンは頷くと次のフィールドへ向かって走りだした。

さくらはその後姿を少し見ると、メニューから帰還を選択して部屋に戻る。そのまま、ゲーム終了を選択した。

晶はヘッドマウントディスプレイを外すと大きく息を吐いた。

そこへ勢い良くドアを開けて入ってくる人物。見れば少々怒りの母親である。

「早く食べなさい。何時だと思ってるの。」

晶はこれ以上母親が怒らないように対処しつつディスプレイの電源を切る。そして、すぐに食事へと向かった。

第七話 少女の現実

第七話 少女の現実

ホームルーム開始のチャイムが鳴る。その音が鳴り始まるが早いか晶は教室へと入った。

先生は晶を見るとすぐに出席表に目を落とす。今も高内にはチャイムが鳴り響いている。

「青山はセーフ、と。」

青山は先生に軽く頭を下げると自分の席に着いた。制服を指でつまんで風を作る。汗ばんだ体に心地よい。

先生が話を始める。来年度受験生だから今から頑張らないとダメだぞというお話をされた。そういえば、一年先輩方は受験戦争中だ。先生は今学期を三年零学期などと言って次の受験に備えるように言っている。

そして、特に何も無く全ての授業が終了した。大学受験を考慮した授業に劇的な何かがあるとは思えない。

青山は荷物をまとめ始める。彼は部活などしていないため、帰って勉強をするか遊ぶしかない。

「あのさ、ちょっといいかな。」

青山は背後から聞こえる声に振り返った。そこには、クラスメイトの関谷が居た。

「何か用。」

青山は素っ気無く応えつつ帰るための準備を続ける。

「あのさ、青山君ってネットワークレジスタンスってオンラインゲームやっているんだってね。佐藤君から聞いたんだ。僕もやっているんだけど、今度一緒パーティー組んでやってみない。」

青山の手が一瞬止まる。しかし、すぐに動き始めた。机の中の教科書類を鞆の中にしまい込む。

「いや、いいよ。お互い時間を合わせるの面倒だし。勉強もしなきゃね。」

青山は鞆を閉めると右手に持った。彼は真っ直ぐに関谷を見る。あとはこの話を終わらせて帰るだけである。

「それじゃ、また。」

青山はそれだけ言うつと教室の出入り口へ向かった。背後から関谷の挨拶が聞こえてくる。

青山は教室を出て一人廊下を歩いた。そして、先ほどの関谷との会話を思いだす。関谷に言えるはずが無い。いや、クラスメイトに青山が女キヤラでゲームをやっているなんて知られたく無い。知られたら、白い目で見るだろう。そしたら、今以上の孤立が待っているかもしれない。言えば孤立決定。いや、またそれも面白いのかもしれない。

「なんで男の格好をした女は理解できるのに、女の格好をした男は理解できないんだろうか。」

青山は近くににいる誰にも聞かれないように口の中で言った。昇降口を出て外に出る。吸い込む空気が冷たい。雪が降るかもしれない。そんな事を考えながら一人帰路へ着いた。

「晶。おかえり。」

家には祖母が居た。洗濯物をたたんでいる。

彼女は晶と一緒に住んでいるわけでは無い。両親の誘いを断つて祖父の造った家で一人住んでいる。そして、毎日晶の家に来るのだ。

「ただいま。」

晶はそのまま自分の部屋へと向かった。部屋に入ると、明日までにやっておくべき勉強を始めた。まだパソコンの電源は入れない。しばらくすると、一階から微かに声が聞こえる。すぐにドアを開けた。案の定、祖母が帰るといふことらしい。晶は玄関まで行く。「洗濯物こんどいたかね。また明日来るよ。」

祖母は半キ口先の自宅から昼間誰も居ない晶の家に来て洗濯物

を取り込んでくれる。あとは、草むしりとか色々。両親が共働きだから本当にありがたい。

祖母が家から出て帰路に着くと、すぐに玄関の鍵を閉めた。夜まで晶以外誰も帰って来ないためである。

鍵がかかった事を確認するとすぐに自分の部屋へと戻る。

晶はドアを閉め、残りの勉強を終わらせた。そして、椅子にもたれかかる。天井を見ながら一度大きく息を吐いた。

晶は男だ。両親も男として育てている。しかし、何か違うんだ何かが。

母親は晶を生む直前まで女の子だと思っていたらしい。今の技術ならお腹の中に居る状態で男か女かはわかる。だけど母親はそれを聞かずにどちらなのか楽しみにしていた。父親、兄と男が続いているからこのままでは男の中に女一人という形になるのが嫌だったのかも知れない。ちなみに兄は今県外で浪人生活だ。プライドと実力が合わなかったらしい。父親も同じく駄目だ。これじゃ先行き不安で仕方が無い。まともなのは母親ぐらいである。

色々とあるが、結果として晶は男として生まれた。彼は男に生まれた事について嫌だという感情は無かった。ただ、母親は女の子が欲しかったということだけは覚えている。それは小さい頃に晶に言ったからだ。その言葉が今でも頭の片隅に張り付いている。

それと、昔から晶は体が弱かった。下手な食物を食べると戻す。体が受け付けないらしい。晶の体がグルメなのか、食べた食物自体が食べられたものじゃなかったのか。何時も廃れた店で食うと起こったから店のミスかもしれない。年齢によってそのようなことはだんだん少なくなった。今ではもう無い。

母親に言われる女の子という言葉。それがちよつとずつ自分の中に何か違和感を創り出したのかも知れない。

決定打はちょうど一年前。中学から好きだった子を何故か中学校に呼んだ。晶自身何故そんな事をしたのか今でも分からない。その行動自体自分が出たのでは無いような気がしてきてしまう。全く、

何かに操られていたと言えば簡単な事だと思う。

当日二人が会っても、すぐに何か告白だとかそう言う事をしたかったわけじゃなかった。いや、そんなものが当初の目的じゃなかったのかもしれない。

ただ、何かに突き動かされるように二人は他愛もない話をした。ちよつどその時学校内に居た家庭科の先生が二人を見つけて中に入れてくれた。そして、手伝わされた。転任するらしい。ちなみにこの先生は、晶と仲の良い友達の母親だとか。世界は狭いと実感する。手伝いの中、晶は彼女に告白した。いや、ただ大切な言葉は言わなかった。それを言う勇気が無かったのかもしれない。

手伝いも終わり駐輪場で再び会話が始まる。今度は会った当初とは違う重い空気だった。

彼女は一度もごめんなさいを言わなかった。ただ、「こんな私じゃだめだよ。」と言うだけ。そこで彼女の過去を思いだそうとした。ほとんどが昔聞いた噂の断片。あの頃は気にしていなかった事。断片が集まり形を成し始めると、彼女の過去を思いだした。やりきれない思いと共に。

晶の口からは誰がなんと云おうと言いたく無い。自分の墓場まで持つて行く事を決めた内容だった。

それでも良いと言った。だけど、肝心な事は言つて無い。言えなかった。勇気が無かったのかもしれない。

それから彼女は少しだけ中学の頃の事を話してくれた。けど、それ以上はもう無かった。それからピアノのレッスンがあることと目的地への道が同じようなので途中まで一緒に行った。別れ際、別の子の話をされた。あの子のほうが良いよつて。けど、晶は断つてそのまま家に帰つた。

それから間もなく、彼女は事故で亡くなつてしまった。

そして、もうすぐ一年が経つ。

彼女は色々嫌な思いをして成るべき姿を何処かに置いてきてしまつた。そして、その姿に成る事はもう無い。もう、彼女はこ

世に居ないのだから。

晶は彼女が好きだった。中学の頃は一緒に色々やってた。部活だって同じだった。部長同士、だった。

そして、晶は行動を始めた。彼女が成るべきだった姿のほんの一部分でも良い。その姿をどこかにつくりたかった。

それが、晶の中だった。

名前は決まっていた。ある事で彼女から貰った名前。彼女をイメージした名前。さくら。

行動を起こしてから、晶のしている事が良く無いことだったことは知っていた。

けど、彼女の姿を追い求めたわけじゃなかった。ただ、彼女の代わりに彼女の生きたかっただろう時間をほんの少しでも送らせたかっただけだった。それが自己満足だったとしても、それでも良いと思った。

だから、晶は今もさくらという名前でネットワーク上に存在している。晶では無い、さくらがそこに存在する。

「ただのネカマと一緒にすんな。」

晶の口からひとりで出た言葉。ネットオカマが元だったと思う。そこで、彼は一人でに笑い出す。

「俺も所詮はネカマか。女になればネカマじゃなくなるのにな。」

晶は仮想空間のみで女性を演じていた。しかし、現実空間への影響が少しずつ表に表れ始めていた。

コンピュータを扱っている間は、特にネットワーク上に居る間は彼女になっていると思いはじめた。

たまに考える事がある。夜眠って、朝起きたときに自分が完全な女の子になっていたならそれはそれで面白いと。

夢の中でも女の子と化す時があった。もう、危ないかもしれ無い。何かを目覚めさせてしまったのだろうか。

しかし、もう止める事は出来ない。

さくらが居ることによって良い事がある。そして、晶が居

ることですくらが生き続ける。

けど……。

「俺は、絶対体まで女にはならない。男としてこの一生を終える。決定済みだ。」

晶はその言葉を自分へ言い聞かせるように呟いた。

理由はお金がかかる事と、血の繋がった子供を持つことが難しいからだ。生半可な気持ちで越えられるほど男女の境界線は低くない。

晶は言い終えると体を起こし、パソコンの電源を入れた。今日もあのプレイヤーはログインしているだろうか。また、一緒に遊べれば良いな。

今日も晶はさくらになる。ただ、自分が求めた姿になるために。彼は今もネカマなのだろうか。それとも、違う何かなのだろうか。

第八話 創造主

第八話 創造主

佐々木の研究室内。彼はコンピュータの前に座ってキーボードを世話しなく叩いている。

佐々木はしばらくキーを叩くと、椅子を引き立ち上がった。腰に手を当てて、上体を反らす。長時間座つての作業は腰にくる。

立つたついでにコンピュータの傍に置いてある空のカップを持って部屋の端にある小さなテーブルへ向かう。テーブルの上には電気ポットやインスタントコーヒーの瓶が置いてある。カップにコーヒーの粉末とお湯を淹れた。

窓に近づき、通りを歩く人達を見る。しかし、時間帯がよろしくないのか二、三人を見るだけだ。そういえばこの時期は春を夢見る受験の季節だ。高校生や中学生が自分の将来のために頑張っている。佐々木にもそんな時期があった。懐かしい限りである。

佐々木は控えめに辺りを照らす太陽を見上げながら、カップから立ち上るコーヒーの湯気を嗅いだ。佐々木は熱いものが苦手だから、コーヒーもある程度冷めるまではそのままである。それまでは淹れたコーヒーから立ち上る湯気を楽しむことにしていた。

佐々木はしばらく何も考えずに外を見るとコーヒーを一口飲んだ。冬の寒い時期のためか、またはカップの保温設計の問題なのか何時の間にか生ぬるい温度になっていた。熱いコーヒーが好きな人には「淹れ直せ。」と言われてしまつたらう。

彼はコーヒーを少しずつ飲みながら研究室内を歩く。歩くと言っても研究室内のテーブルの間を行き来するだけである。長時間同じ姿勢で作業をするために運動不足は深刻だ。だから、せめて研究室への行き帰りだけは歩くようにしている。コーヒーが無くなると再度コーヒーを淹れてコンピュータの傍に置き作業を再開した。

既に昨日までに寄せられた変わった質問の処理、新種についての詳細なデータのまとめ。どちらも大塚に伝えるべき内容については伝えた。

佐々木は画面上に二つのグラフを出す。年が変わりユーザー数、削除数は軒並み上昇中だ。そろそろサポートシステムも多人数向けに改良を加えたほうが良さそうである。サポートシステムはユーザーが集まるメインサーバーに置かれており、各ユーザーのゲームシステムからのサポートに関する通信を受け取り処理をしている。当初はユーザーの少なさとサーバー側の処理能力の問題から同時に処理を行う数を少なめにしていた。しかし、このままユーザー数が増えればサーバーへの負担が増大する。そろそろ切り離して各サーバーで増強を行っていくべきか。

佐々木はコーヒーをそのままに研究室を出て反対側にある大塚の研究室のドアをノックした。中から声が聞こえたのでドアノブを回してドアを開ける。

「佐々木君。どうしたんだい。」

真横では二台のサーバーが五月蠅く騒いでいる。そのサーバーに張り付くように二人の男性研究員が要る。どちらもディスプレイをじっと見たままでこちらには気がついていないようだ。彼らの横を通り抜けて大塚の元に着く。

「先ほどサーバーから送られてきた情報を見て考えたんですけど。」

そろそろメインとサポートとの分離増強をしたほうが良いと思います。」

大塚はサーバー前に要る二人の研究員を見る。二人も佐々木の登場に驚き大塚を見ている。

「お前たちはどう思う。」

「そうですね。」

二人のうち一人が自分の前にあるコンピュータを操作する。するとディスプレイ上にいくつかの画面が表示される。彼は表示された内容を確認すると再び佐々木たちのほうに体を向けた。

「最近のユーザー数の増加を考えますと二、三月以内の増強は必須です。しかし、メインシステム単体にすればサポートシステムに割いていた処理を取り戻すことができます。ここは一つ、サーバーを分けて分担させたほうが良いのではないのでしょうか。」

大塚は研究員の言葉を聞き何度か頷く。

「わかった。サポート用に使えるサーバーを作ろう。しかし、HDDはあっても本体が無いんだ。どうしたものか。やっぱり買うか。」

佐々木は大塚の「本体」という言葉に反応する。そういえば、前に荒谷から研究室でコンピュータが余っているから使うなら譲るというお話があった。今でも残っているだろうか。確かめる必要があるそうだ。

「大塚さん。前に荒谷の所でコンピュータが余っていると聞いています。もし、残っていたらそれを使わせてもらいましょう。」

大塚は頷く。使わずに残っているのならば使わせてもらったほうが良い。

「じゃあ、ちょっと行ってきてもらえるかな。」

佐々木は大塚の言葉に頷き、研究室を出る。そして、荒谷の研究室へと向かった。彼の研究室は同じ階の一番奥にある。

佐々木は研究室のドアを叩く。中から声が聞こえる。荒谷の声だ。佐々木はドアノブを回して開いた。

「こんちわ。どうだい。」

佐々木がドアを開けると同時にサーバーの五月蝿い音が聞こえてくる。出入り口の傍にサーバーが三台あり、奥にはミドルタワーのPCがディスプレイとセットで十台近くある。ミドルタワー型のPCの多さに自分が大学生に戻ったかのような、もしくは学生の居る大学の研究室のような錯覚を覚える。全てのディスプレイにはそれぞれ映像が流れている。出入り口からは遠くて何が映されているのかは分からない。

それらの中心に荒谷は居た。彼を中心に円を描くようにディスプレイとPCが並べられ、まとめて一つのキーボードに繋がってい

る。そのキーボードは回転可能なテーブル付きの椅子に置かれている。

彼は大きな体を丸めて器用にキーボード操っている。よく見れば小型のキーボードでテンキーは付いていない。テンキーは邪魔になるだけで別にあつたほうが良いのだ。

「おう。どうしたんだ。」

荒谷は佐々木の来訪に応えつつ各ディスプレイを見ながらキーボードを叩いている。彼は、器用に椅子を操作して目的のディスプレイ前に止まり作業をしている。佐々木は正確に停止する荒谷の姿に感嘆の声をあげそうになる。

その動きはHDDの読み込みにちよつと似てるなと思つた。自分が回転している点が違うが。

荒谷と佐々木は大学時代の仲間。とは言つても、彼らの大学時代自体が遠い昔になっている。佐々木は一瞬大学時代の思い出に浸りそうになる。すぐに頭を軽く横に振ると荒谷を見た。

「いや、前に余っているコンピュータがあるって言つてたよな。まだあるなら使わせてくれないか。新しいシステムを動かすために使いたいんだ。」

荒谷は用件を理解すると、研究室の端に積まれたコンピュータの中から一つをひっぱり出した。

「ちよつとCPUの型が古い事とHDDとメモリ無し。それでいいなら使つていいから。」

荒谷の話では今のコンピュータの構成にするときに引退させた物らしい。佐々木はHDDとメモリ無しというジャンクのような構成にちよつと嬉しくなりつつ中身を見た。荒谷の話ではCPUが二つ搭載されていて、各CPUはオクタコアだということだ。対応しているメモリも幾つか研究室に余っていたはずなので使えるだろう。

「良さそうだ。貰つていくよ。ありがとう。」

佐々木は重いコンピュータを両手でゆっくりと持ち上げると荒谷を見た。

「区切りがいたら、今日何処かに飲みに行かないか。おごるよ。」
荒谷は佐々木の言葉に伝えるとポケットから懐中時計を取り出して時間を見た。

「じゃあ、七時ぐらいに切り上げてそっちに行くよ。それでいいか。」

佐々木は荒谷の言葉に伝えるとコンピュータを抱えて荒谷の研究室を出て大塚の研究室へと戻った。

「貰ってきました。オクタコアのCPU二つ。これだけあればユーザーからのサポートを捌けるでしょう。」

佐々木は大塚の前に荒谷から貰ってきたPCを置いた。

「HDDとメモリは無しです。対応しているメモリは自分の研究室にあったと思うので取ってきます。」

佐々木は大塚にそれだけ言うとお自分の研究室に戻った。彼は部屋の隅にある使用していないパーツの置き場を漁り、目的のメモリを幾つか取り出す。十分な量のメモリを持ち大塚の研究室へ向かって歩き出す。そこで立ち止まり、ふと彼のコンピュータのディスプレイを見た。すると、そこにはターゲットが発見されたとの報告がある。

「また来たか。」

佐々木は持っていたメモリを傍に置くと椅子に座りターゲットの情報を大塚へと送った。リターンキーを押して送信された事を確認するとメモリを持って大塚の研究室へと戻った。そして、各パーツを装着して動作確認を始める。

「ターゲットが見つかったようだね。今さっき届いたよ。今二人にイベントを作成して貰っている。次のメンテナンスを挟んで週末には行えるかな。こっちもその時に稼働させよう。」

大塚の言葉に承えつつ貰ってきたコンピュータの動作確認をした。それから研究室内に置いてあるOSや必要なソフトウェアをインストールし、サポートシステム向けのサーバーを構築した。そして、バックアップしておいた現在稼働しているサポートシステムを

インストールし動作確認を行った。プログラムの動作及び外部からのアクセスによる処理もうまくいった。あとは、次回メンテナンス時にサポートプログラムの処理を新しく構築したサーバー側で行えるようにするだけだ。

「現行のサポートシステムは入れました。これから研究室に戻って新種の収集と多人数向けのサポートシステムの構築を進めます。ターゲットのほうはお願いします。」

大塚の応えに佐々木は頷くと大塚の研究室を出て自分の研究室へと戻った。

佐々木は研究室に戻るとコーヒーを淹れてコンピュータの前に座る。それからしばらく、彼はディスプレイを見たままキーボードを叩くのみとなった。

何時しか辺りは暗くなり荒谷と約束した時間が近づく。しかし、佐々木自身はその事に気が付かない。

佐々木は椅子にもたれかかり、背伸びをする。新しいサポートシステムについてはほぼ完成し、実機での動作確認をするのみである。しかし、これは多人数向けにシステムを変更しただけであり使用する側が目に見えて変化を感じられる物では無い。折角メインシステムからサポートシステムが切り離されたのだから、今後はもっと便利で不具合の無いサポートシステムを作るために現行のシステムを改良していくことにする。

そこへ、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞ。」

佐々木の声に反応してドアを開けたのは荒谷だ。既に帰宅可能な状態になっている。そこで彼は昼間自分が言った事を思いだした。「あ、そうだ。ちょっとそこで待っていてくれ。」

すぐに目の前の作業を区切りの良い所で終わらせコンピュータを終了させる。コンピュータが終了の作業を始めると自らも帰り支度を始めた。

「済まない。自分で言ったのにすっかり忘れていたよ。」

まとめた荷物を持つと荒谷の所に向かう。

「少しぐらい良いよ。お前のところはオンラインゲーム作っているんだろ。新しいシステムの構築とかメンテナンスとか、色々大変なんじゃないか。」

荒谷は佐々木の研究室を出る。佐々木も研究室の明かりを消して出た。

「いや、オンラインゲームを含んだ削除ソフトウェアだよ。削除対象は色々あるけど。僕はサポートだけ。今は大塚さんのほうでメインシステムを作ってる。」

佐々木は研究室のドアの鍵を閉めながら荒谷の発言に対応する。

「何にせよ。生身の人間がコンピュータを挟んだ反対側に居るんだから大変だよな。」

佐々木と荒谷は研究所を出て夜でも賑わいを見せる区域へと向かった。

駅前から少し離れた通りには居酒屋やカラオケ店、ゲームセンターなどが遅くまで明かりを灯している。

「何時ものところでいいよな。」

佐々木の言葉に荒谷が頷くと通りの中にある居酒屋へと入った。「いらつしやいませ。」

二人はテーブル席に通され、店員に注文を伝える。店員が去ると二人はそれぞれが今行っている研究について意見を交換した。

荒谷は大きなサーバーと複数のPCを用いて何の研究をしているのか。彼の研究分野は一言で言えばシミュレーションである。シミュレーションする相手は人間を含む世界。しかし、無数の人間の行動をシミュレーションするには沢山のコンピュータが必要になる。しかも人それぞれの行動は現行のコンピュータのように順番に処理を行うのでは無く同時に処理を行う必要がある。つまり、並列計算が必要となる。そのため、荒谷は複数のPCを合わせて並列に動作させる事によって同時に複数の人間や人間を含む世界をシミュレーションしようとした。

荒谷の研究は人間相手ではあるものの生身の人間では無く、データ化した人間の情報を元に実験を行っている。そのため、荒谷自身へ不満を言うのは彼の上司や仲間といった研究外の者である。シミュレーションしている世界の住人は見えない創造主を神として信仰し日々を過ごしている。現実世界の現状を反映させればさせるほどシミュレーションの世界は現実に近い、よりリアルになる。

リアルになったのはシミュレーションしている人間や世界の状態だけで無く、その世界自体でもある。つまり、荒谷が作り上げシミュレーションしている世界を一人の住人として自由に歩きまわれるようにしたのだ。現実の人間が仮想の世界の住人として人々と触れ合うゲームはこれまでも幾つか存在する。しかし、それらは必ず反対側に生身の人間が存在し、現実世界と大差無い仮想世界を作るだけであった。しかし、荒谷が行っている研究はそのようなものでは無い。シミュレーションを行っている世界を自由に歩きまわれる機能はシミュレーションによって出来上がった世界を確認するためであり、自ら住人とはならない。住人はシミュレーションを行っている世界の住人のみである。また、現実世界の人間がその世界への過度な干渉も避ける必要がある。

荒谷が言うには、創り上げた世界がそれ一つで自立して繁栄と衰退を繰り返す必要があるとのこと。創造主が行う行為は住人が住む世界の創造とその世界で通用するルール決めだけである。それ以外は行わない。後は決められた世界とルールの中で住人が生活をする姿を確認するだけである。

二人が話していると注文した酒やつまみがテーブルの上に並べられる。

「そっちは世界を創っているんだからな。面白いだろうな。」

佐々木はつまみとして出てきたなんこつをかじりながらビールを口に含む。

「佐々木の所も同じだろ。ゲーム上の世界を作り上げているじゃないか。」

荒谷は頼んだえだまめを一個ずつ口に放り込んでいる。何個か口に放り込むと手元のビールで流し込んだ。

「いや、こっちは人が集まる空間だよ。参加する人間が居なければ成り立たない。そっちは単体で十分機能するじゃないか。一つの世界があるんだ。」

そこで佐々木は荒谷の前にあるえだまめを一つ掴み口に入れる。

「世界の創造主。お前は神だな。俺も神になりたいよ。」

佐々木は笑顔のまま大きく息を吐く。

「神も面倒だぞ。自分が創った世界をシステムが停止するまでずっと見届ける必要がある。その世界でどんな事が起きてもね。」

そこに店員が来てまだ届いていないつまみがテーブルに追加される。出てきたのはサーモンのお造りと手羽揚げ。二人がそれぞれ頼んだものだ。料理が出てくると荒谷は手羽揚げを見て嬉しそうにしている。手羽揚げは荒谷の好物なのだ。佐々木は学生の際に荒谷自身から聞いた事を覚えている。佐々木はその光景を見ながらサーモンを一切れ口に運ぶ。

「やっぱり、その世界でも戦争とか紛争とか起きてるのか。」

店員が離れた事を確認すると佐々木は荒谷に尋ねる。荒谷はビールを飲むと頷いた。

「やっぱりこつちと変わらない。世界が生まれてからあまり時間が経っていないっていうのもあるかもしれないけどね。」

荒谷は言い終えると早速手羽揚げに食らいつく。肉を覆う脂が照明によって光る様はなかなかの誘惑である。荒谷が嬉しそうに食べる様を見ながら、佐々木も手羽揚げを一つ取って口に運んだ。手羽揚げを食べ始めると両手が塞がる事と同時に手が汚れる。そのため、食べるときは食べようという事なのか荒谷は二個三個と食べる。佐々木も手羽揚げの山を崩すように食べていった。他のつまみも食べつつお互いビールを二杯おかわりした。

結果、二人は店内の他の客同様酔った状態になる。

「だからあ、やっぱり変わんないのよ。外からの力か劇的な何かが無

いとさ。」

傍から見ても酔ってしまつた荒谷を見ながら、佐々木は此処まで酔わす予定では無かつたのにと思つ。

二人はつまみを平らげ会計を済ませると居酒屋を出た。

荒谷の大きな体が左右に頼りなく揺れる様は佐々木にとって恐怖を覚える。なんとか荒谷を支えながら彼の家まで送る。

「帰つたよ。」

ドアを開けると荒谷が言う。酔っているためか何時もよりも声大きい。すぐに足音と共に少女が玄関に来る。彼女は彼の一人娘だ。

「おう、鈴花。ただいま。」

荒谷の言葉に鈴花は大きいため息を付き佐々木を見る。

「佐々木さん。父を送つて頂いてありがとうございます。」

お辞儀をする鈴花の背後から荒谷の奥さんが出てくる。

「本当にすみません。鈴花水持つて来て。」

荒谷の奥さんは荒谷の傍にしゃがみ込む。それと交代して鈴花は奥へと下がつた。

「いや、お互い今日は飲みすぎたんです。すみませんが、後をよろしく願ひします。」

佐々木はそれだけ言うとお辞儀をして荒谷の家を離れ自分の家へと帰つた。

「ただいま。」

佐々木が帰ると彼の息子が一人出てくる。佐々木は息子の頭を軽く叩きながら自分の部屋に荷物を置き、台所に向かつた。佐々木の妻がコップに入れた水を差し出す。コップを受け取り一気に水を飲み干した。彼はコップを受け取れるだけまだ大丈夫そつだと自分に言い聞かせつつダイニングチェアに座つた。

「お茶漬けでも食べる。」

佐々木の妻は空になつたコップに水を注ぎながら言った。佐々木は頷きながらコップを受け取り水を一口飲む。

「拓哉は寝たのか。」

佐々木の妻は頷き、息子が居る部屋を見る。

「あなたが帰ってくるまで起きて居たいって言ったのよ。今はもう寝たわ。」

佐々木はコップに残った水を一気に飲み干すとテーブルにコップを置いた。

「風呂入ってくる。お茶漬はそれからいい。」

佐々木は立ち上がると風呂の準備のために自分の部屋へと向かった。

「大丈夫なの。もう少し酔いが冷めてからでも良いんじゃない。」

佐々木は妻を見る。彼女は心配そうな顔で彼を見ている。彼は首を横に振り自分の部屋へ向かった。

着替えを持って脱衣所に行き服を脱ぎだす。そこで、一瞬動作を止めてある事を考えた。

「この世界と全く同じ世界をコンピュータ上で創ることが出来たとしたら、この世界がもう少し美しい世界に変わるヒントが得られるかもしれないな。」

彼は再び動き出すと、風呂場で熱いお湯を頭から被った。

第九話 レベル下げ

第九話 レベル下げ

さくらが自分の部屋に移動すると画面に幾つかの情報が表示された。内容としては今日の夜九時からターゲット戦を行うとの事だ。公式サイトを確認して居なかった事とメンテナンス後にログインしていなかったため気が付かなかった。

ターゲット戦。それは不定期に行われる巨大モンスターを相手にした戦闘である。このターゲット戦は戦闘開始の十分前までターゲット戦が行われている間に順番に話しかけると通常のフィールドへの転送とともにターゲット戦への参加登録が選べる。戦闘開始五分前までに登録を済ませた上で広場もしくは自室にて待機していると自動的に専用フィールドに転送され戦闘が開始する。戦闘開始後に登録した場合は登録後すぐにフィールドに転送される。なお、戦闘開始前に参加登録をしても戦闘開始五分前までにプレイヤーが広場もしくは自室に待機していない場合は参加登録が無効となる。この場合、参加するには戦闘開始後再度登録する必要がある。また、ターゲット戦の戦闘フィールドは現在一種類のみである事、戦闘に参加している間は脱出アイテムが使用不可である事とターゲット戦である旨が画面の右上に常時表示される事が通常とは異なる。

参加プレイヤーが多い場合は各プレイヤーレベル別に複数の専用フィールドに転送される仕組みである。この場合レベルの違うプレイヤーと一緒に戦えない。また、同じレベルのプレイヤーでも同じ専用フィールドとなるとは限らない。そのため、一緒に戦いたい場合はパーティを組む必要がある。

なぜこのような戦闘がターゲット戦と呼ばれるのかはわからない。しかし、フィールド上に存在するモンスターの親玉であると言う事が公式サイトに記載されているため倒すべきターゲットである

事は確かである。

晶はヘッドマウントディスプレイを外して時間を見る。七時を少し過ぎた頃だ。登録しても時間がある。通常フィールドで戦つてこようか。

さくらは自室を出て広場に出た。そして、念のため登録した友達がログインしているか確認する。しかし、誰も居ないようだ。やはり一人で行こうか。彼女はそう考えながら画面を閉じようとした。閉じるのボタンを押そうとしたとき、友達の一人がログインした状態になる。ケンだ。彼はどのくらいまでレベルが上がっているのだろうか。

さくらは既にレベル四まで到達していた。同じレベルなら面倒は無いけどどうだろう。

さくらはケンにメッセージを送る。内容は広場に居る事とこれから一緒に戦わないかというお話である。返事はすぐに来た。もうすぐ広場に出て来るらしい。

さくらが自室への扉を見ると、何人かのプレイヤーと一緒にケンは出てきた。

「こんばんは。久し振り。」

お互いが挨拶を交わす。ゲーム世界でも一応挨拶は必要だと思う。「ケンってレベル幾つになったの。」

「三だよ。これでもなるまで長かったんだよね。」

さくらの言葉にケンは応える。ケンの言葉からさくらとは一レベル差のようだ。彼はしきりに自分の武器と防具を見ている。まだ使い始めて間もないのかもしれない。

さくらにとってはこのままパーティを組んで遊んでも良いが、ここは一つ同じレベルになったほうが良いと思った。ケンと初めて会ったときのようにレベル差があるとレベルが高いほうのプレイヤーばかりが活躍することになる。

「私もレベル三になってくる。ちょっと待ってて。」

さくらは引きとめようとするケンをかわして自室へ戻った。すぐ

に武器と防具が置かれている場所へ行き、現在着ているレベル四からレベル三の武器と防具に交換する。

このゲームの面白い所は武器と防具でレベルが決定する点である。そのため装備を変更すればすぐに対応したレベルに変更される。下位のレベルにして何が良いのか。このゲームの場合はほぼ全てのモンスターが各レベル限定で出現するため、敢えて下位レベルのモンスターと戦いたい時に良い。この点が上位のレベルこそ凄いいという従来のレベルシステムとは異なる点である。

さくらは装着し終わるとすぐに広場へと戻った。

「なんで、レベル下げたの。弱くなっちゃうじゃん。」

ケンハレベルを下げた意味が良く分からないようだ。まさか、レベルが上がる毎に下位レベルの武器と防具を売っているのだろうか。もし、そうだとしたら勿体無いとしか言えない。

「レベルを下げたからって相手モンスターとの力の差は変わらない。ただ、出現するモンスターが変わるだけよ。それに、同じレベルなら前回のようレベルの低いほうの出番が少なくなる事も無いわ。」

さくらが少し前まで使っていたレベル三の武器と防具。腕を動かしながらその装飾や形を見る。レベル四になってからいくらかも経っていないが、レベル三の武器と防具がかなり昔に使っていたもののように思えた。

「合わせて貰うなんてなんか嫌だな。自分が弱いみたいで。」

ケンは不満そうにさくらを見る。ケンにとってはこのゲームでも上位レベルこそが到達すべき場所なのだろう。さくらはケンと目を合わせず弓をじっと見た。

「確かに各レベルで攻撃力や防御力は違うけど。レベル三のモンスターにレベル四の武器で攻撃する事は出来ない。だって、自分のレベルに合ったモンスターしかフィールドに出現しなくなるから。もし、パーティを組んでいる場合はパーティのレベルの平均で出現するモンスターと強さが決まるわ。」

さくらは弓から目を離すとケンを見た。

「つまり、レベルを下げたからといって楽しめなくなるわけじゃないわ。一方通行のレベル上げるよりは良いと思うけどな。」

言い終えるが早いか、さくらは歩き出した。

「お、おい。何処いくんだよ。」

さくらはケンの言葉に振り返り彼を見る。

「ここにずっと居ると邪魔になるから。戦闘前だし、買い物に行きましよう。」

さくらはそれだけ言うと、店が並ぶ場所へと歩き出す。ケンもさくらに追いついて並んで歩いた。

「ねえ、ケンって今日のターゲット戦に出るの。」

さくらは歩きながらケンに聞く。視線は前を向いたままだ。

「ターゲット戦か。誰か一緒に出る人が居れば出るかな。」

さくらは目の前に薬屋が見えると走りより、薬をいくつか選んだ。彼女はお金と交換で品物を受け取るとゆっくりと振り返る。背後にはケンが居るはずだ。そして、実際さくらの背後にケンは居た。「一緒に参加してあげよっか。」

さくら自身目一杯かわいい仕草を加えて言ってみた。

ケンの反応を待ったが、すぐには返答が来ない。さくらはケンに近づく。

「ん。どうしたの。」

さくらがある一定距離まで近づくと、ケンは生き返ったかのようには体を動かした。

「あ、ああ。じゃあ、よろしくね。」

ケンは薬屋に向かって歩き出す。さくらがケンを目で追うと、彼も彼女を見た。

「ちよっと待ってて。僕も薬買ってくるよ。」

ケンが薬屋から戻ってくると、二人は門番の居るゲートへと向かって歩いた。

二人がゲート前に着くと、早速ケンが門番に話しかけようとした。

「待って。」

さくらはケンとパーティを組んでいないことにいまさらながら気がついた。このまま通常フィールドに入ったらバラバラになるし、ターゲット戦の参加登録も別々になってしまう。彼女はメニューからパーティ申し込みを選び、対象をケンにした。するとすぐに承諾されパーティが成立する。

「パーティ組まないと一緒に戦えないわよ。私も忘れてた。」

さくらはケンよりも門番に近づき、ケンを見る。

「私が参加登録とフィールドへの転送をするから。」

さくらは門番に話しかけ、ターゲット戦の参加登録を選ぶ。すると画面に「参加登録が完了しました」というウインドウが表示された。そのウインドウを消すと、再度門番に話しかけて通常フィールドへの転送を選んだ。

目の前が真っ白になり、次の瞬間にはケンと共にフィールドに立っていた。

「ここは、島。海に浮かぶ島か。」

ケンがあたりを見回す。しかし、さくらにとっては何時も見えるフィールドだ。

「ここは私のフィールドよ。」

さくらはケンを見る。ケンもさくらを見ようとこちらを向く。

「パーティの場合は参加者のフィールドの中からランダムで初期フィールドが選択されるの。今回は私の所みたいね。」

さくらはあたりを見回す。いつものように太陽があたりを照らしている。地面の光の反射から本当に暑そうだ。そこでさくらははつとす。こんな所に立っていたら危ない。

「こっち来て。」

さくらはケンとともに近くの岩に移動する。すぐに近くで波の音がした。モンスターが出現した音だ。さくらは矢を番え少し引いた状態にしたまま岩から音の聞こえたほうを見た。現れたのは大きなヤドカリのようだ。さくらやケンの身長とほぼ同じである。さく

らはこのモンスターと前にも戦ったことがあった。触れただけでもダメージを受ける殻は外との関わりを拒んでいるようにも見える。

「私が注意を引くから、ケンはその間に攻撃して……。」

ケンのほうを見ても彼は居なかった。さくらはまさかと思いやドカリのほうを見る。案の定、ケンはヤドカリに向かって走っている。

「ほんといいわよね。」

さくらは岩から離れると、ヤドカリに狙いを定め弓を思いっきり引いた。ヤドカリはケンを発見しこちらに向かって来ている。

「近距離は。」

さくらが矢を放つ。矢はケンに攻撃を仕掛けようとしたヤドカリに命中し、一瞬動きが止まる。そこへケンは大きな剣を振り下ろした。剣が重たいためかヤドカリに当たった時の衝撃は大きくヤドカリの体が縦に揺れる。

さくらはヤドカリに近づきなが矢を番える。一定距離までつめると立ち止まり、ヤドカリへ狙いを定め弓を引いた。

再び動き出したヤドカリはお怒りのようで通常よりも早い速度でケンを追いかけた。ケンは逃げることでできず、攻撃する事ができない。しかも、ケンがヤドカリに攻撃しようと振り返り立ち止まると、その体にヤドカリは真正面からぶつかってきた。一人でヤドカリと戦うには攻撃を受けてもそのまま戦うしかないということである。

さくらは動き回るヤドカリを良く見ると、狙いを定めた。狙いはヤドカリではなくヤドカリが次に居るだろう位置に定める。

さくらが矢を放つ。矢が目的の位置に到達するころにはヤドカリもその位置に移動しており見事に命中した。

ヤドカリは矢が当たると目の前の獲物を追う事を止め、すぐに矢が放たれたほうに体を向ける。矢を放ったさくらを発見するとこれまで以上に素早く一直線に彼女に近づいてきた。

さくらはすぐにその場を離れて走ったが、ヤドカリの足が速い

ためにすぐに彼女との差が詰まっっていく。

その時、さくらの背後で爆発音と共にヤドカリの悲鳴が聞こえた。彼女が振り返ると、ケンは動きが鈍くなったヤドカリの背中に剣を振り下ろしている。ヤドカリは動かなくなり、二回ポイントが表示された。パーティの人数が二人なので二回である。

「持っててよかった手投げ爆弾。」

ケンは黒い球を持っている。さくらは手投げ爆弾が使えることは知っていたが必要であるとは思えず購入していなかった。こんな所で助けてもらうとは予想外である。やはり何個か持っていたほうが良いのだろうか。ケンの手の中で跳ねる球を見ながらさくらは思った。

「ありがとう。おかげで助かったわ。」

さくらはケんに礼を言いつつ辺りを見回す。すると、口を勢いよく開け閉めする貝が海から何個も現れた。

「次はあいつだな。」

ケンも貝の存在に気が付き剣を構えて突進していく。さくらもその後が続いた。貝は先ほどのヤドカリの三分の一程度の大きさであるため遠くから弓で狙うのは難しい。

二人が貝に近づくと、貝は二人に向かって跳ねながら近づいてくる。さくらは狙いを十分に定めずに素早く弓を引き矢を放っていた。ケンも何度もケンを振って貝が早く消えるようにしている。しかし、さらに海から援軍が来る。

「きりが無い。逃げるぞ。」

二人は貝たちの視線から逃れるように逃げた。幾つかの岩を通り過ぎ、山と山の間を越えて反対側の海に出る。反対側の海は静かでモンスターも居ない。そこへ先ほど居た方向から何個か貝がやってくる。しかし、逃げる前よりも少なくなっていた。やはりあの場所を離れたことは正しかったのかもしれない。

ケンは武器を構えると貝に向かって走っていく。さくらは貝に近づきつつ弓を引いた。近づいてくる貝に対して近距離で矢を放つ。

貝がちょうど飛び上がったときに矢が当たったため後方に転がっていった。再び弓を引こうとしたとき横から別の貝が攻撃してきた。体の肉を勢いよく挟みこむ攻撃方法は見るからに痛い。本当の痛みを感じる事ができるのなら相当な痛みだろう。体に付いた貝を引き剥がすと、一個ずつ倒していった。

二人とも夢中で貝への攻撃をしていると、いつの間にか貝はすべて消滅していた。

「倒したのか。厄介なやつだったな。」

ケンはその場に座り回復薬を使う。そして、空を見上げた。さくらは回復薬を使いながら辺りを見る。出口があるのなら、すぐにも他のフィールドに移りたいところである。ちょうど二人の近くに出口があった。走ればすぐの距離にある。彼女ははまだ座っているケンのそばに寄ると出口を指差した。

「あそこの出口から出るよ。」

ケンはゆっくりと立ち上がり出口を見る。さくらは彼を見て続けた。

「出口まで走るよ。」

さくらはそれだけ言うと、出口に向かって走った。留まっていればまたモンスターと戦闘になりかねない。

二人は走って今居るフィールドから出た。

第十話 謎のフィールド

第十話 謎のフィールド

通常フィールドから出ると二つのフィールドを繋ぐ洞窟に入るはずである。しかし、ケンとさくらはそこを通らずに次のフィールドの中に入っていた。さくらは自分が洞窟の部分を見ていなかっただけなのかもしれない。そう思ってケンに聞いてみるが、彼も洞窟を見ていないらしい。仮にモンスターに見えられた状態で出口から出ても洞窟に入ることになっている。先日のメンテナンスで何か不具合でも起きているのだろうか。そして、もうひとつ気になることがある。

「こんなフィールド、今まで見たこと無い。」

新たに入ったフィールドは、縦横一メートルの青い正方形のタイルが敷き詰められた遺跡のようなフィールド。入ってきた場所から見ると、目の前にはまっすぐ伸びた通路があり両側に別の通路もしくは部屋の入り口が見える。二人の位置からまっすぐに伸びた通路も途中で丁字路になっている。そのため、左右に伸びた道の先はこの位置からは見えない。

「とりあえず先に進んでみよう。」

さくらはケンの言葉に頷き、フィールドの奥へ向かって歩き出した。

一定間隔ごとに置かれた照明が辺りを照らしている。照明に照らされた体が影を作り、得体の知れない大きな生物に見える。天井は光が当たらず真っ黒い世界を作り出していた。

両側にある部屋もしくは別の通路を覗きながら丁字路へ向かって歩く。今のところ何も出てこない。通常のフィールドならばこの辺りで一体ぐらいは出てきてほしい所である。しかし、なかなか現れない。まるでこのフィールドにはモンスターが存在しないのでは

ないかと思えてしまう。そして、二人は丁字路に着く。

「左右。どっちにする。」

ケンが尋ねてくる。さくらにとっては正直どっちでも良かったので左を指差した。彼女が左利きだからである。

「左ね。」

さくらはケンに聞かれたために答えたが、特に考えて答えては居ない。

ケンが左の道を歩き出すと、さくらもその後が続いて歩きだした。するとすぐに右へ曲がる道を発見する。覗いてみるとその奥には広い部屋が見える。二人はその部屋に入り込んだ。等間隔に置かれた照明が照らす部屋は正方形で広い。その奥にはこの部屋から別の部屋もしくは道とを繋ぐ出入り口らしきものが見える。

二人は部屋の中心に立つ。辺りを見ても特に何も無い。

「もうちょっと、進んでみましょう。」

さくらは部屋の中心から歩き出した。その後をケンが歩く。二人は先ほど見つけた反対側の出入り口から部屋を出た。

部屋を出るとそこには左右に伸びたまっすぐの道があった。道の途中には部屋もしくは別の道への入り口が無数に見える。

「なんか、迷いそうだ。」

ケンが左右を何度も見ている。左右どちらの道も直線の後丁字路によって二手に分かれている。どちらも同じように見える点が厄介だ。

さくらが歩き出そうとした時、どこからか空気の漏れる音が聞こえる。

「な、何。」

二人は辺りを見る。しかし、特に変わったところはない。さくらは気のせいかと思い再び歩き出そうとする。

そのとき、何か大きなものが地面に落ちる音がした。ほんの少し地面が揺れる。さくらが歩き出した方向には何も無い。そこで、自分の右腕がつかまれている事に気が付いた。掴んでいるのはケン

だろう。そこでさくらはまさかと思いきや振り返った。すると、怯えた目でさくらを見るケン。彼女は彼が指差すほうを見ると体が固まった。

まっすぐに伸びた道の奥。そこに、大きな蛇が居た。とにかく大きいという印象で、体長数十メートルはあるのではないかと思えた。蛇の口から長い舌が出たり入ったりを繰り返している。すぐに自分たちでは倒せないと思った。これまで見た中で一番大きいからだ。

そして、蛇はケンとさくら目指して動き出した。さくらはその光景を見ても動けず立ったままだ。その腕を強く引つ張るのはケンだ。

ケンが強くひっぱることでさくらの足がゆっくりと動き出し先ほど通った部屋へ再び入る。さくらはケンになお強く引つ張られながら背後を見た。まっすぐ伸びた道から蛇が部屋の中を覗いている。その目に恐怖を覚え、叫びそうになった。そして、蛇は部屋の中に入ってくる。二人はすぐに部屋を出て来た道に戻った。その頃にはさくらも自分の足で走れるようになっていた。走らなかつたら死ぬ。だつたら走る。単純な話だとさくらは思った。ケンの手を離すと自力で走り出した。二人は角を右に曲がりフィールドの出入り口へと向かう。今はこのフィールドから出るしかない。

二人は力の限り全力で走った。背後からは蛇が近づいてくる。必死に走る先に誰か居る。近づくと、ハンマーを持ったプレイヤーのようだ。その後ろに三人のプレイヤーがいる。さらに近づくと相手もこちらに向かって走り出した。

「俺たちが倒してやる。」

男四人はケンとさくらの代わりに蛇に向かっていった。ケンとさくらは立ち止まりその光景を見る。四人はそれぞれハンマー、槍、双剣、弓を用いて蛇に攻撃している。数ある横道を利用して別の位置から攻撃をしたりと、一人では出来ない攻撃を繰り返している。

さくらはケンを見る。彼は地面に座り四人が戦う姿をじっと見

ている。彼は攻撃しないようだ。ケンの武器は近距離専用であるために近づいたら蛇に攻撃されておしまいかも知れない。その点でさくらの武器は弓なので遠距離から攻撃できる。彼女は弓を引き蛇に狙いを定める。そして、矢を放った。ここから矢を放ち続けることが今さくらが出来る唯一の事である。

蛇はさくらからの矢に何度か気をとられながらも四人のプレイヤーの相手をした。しばらくして蛇の鳴き声は聞こえなくなり動かなくなった。

さくらはその場に座り込み蛇が消えていくさまを眺めた。そして、蛇に攻撃していた四人がこちらに向かって歩いてくる。

「大丈夫だったか。」

ハンマーを持った男がさくらに手を差し出す。さくらはその手を掴み立ち上がった。そして、彼はケンを見る。

「お前は自分で立ちな。」

彼の背後の三人が笑っている。ケンは自分で立ち上がった。

さくらは四人にお礼を言う。しかし、ハンマーを持った男はさくらよりもケンを見ていた。

「だらしがない。これじゃ彼女を守れないぞ。」

ケンはその言葉に返す言葉も無いようで黙って視線を地面に落とした。

「最初から守りきれんとは思ってませんから。」

さくらの言葉に四人が笑う。ケンはさくらを守りきれない。けど、一部は守れた。

「あれ、この弓ってレベル三じゃないかな。」

四人のうちの一人。弓使いの男がさくらの弓を見て言った。その言葉を聞いたハンマー持つ男は驚く。

「はあ、どんな仕様だよ。二レベル差のプレイヤーが一緒のフィールドに居るなんてよ。」

さくらは彼の言葉で気が付いた。二レベル差。彼の言葉が正しければ彼らはレベル五なのだろう。

ハンマーを持った男は首を横に振るとケンとさくらを見た。

「まあいい。今度は気をつけな。じゃあな。」

ハンマーの男はそれだけ言うつとフィールドの出口に向かって歩き出した。

「あ、あの。」

さくらの声でハンマーの男は立ち止まり振り返る。そして、何も言わずさくらを見た。

「名前。あなたの名前、何て言うんですか。あの、私はさくらです。こっちはケン。」

彼は目を閉じて少し笑うと再度さくらを見た。

「俺はアロン。あとは右からルイ、トマとリッツだ。」

ハンマーの男が言うつには彼がアロン、槍使いがトマ、双剣使いがリッツと弓使いがルイである。

「それじゃ行くか。」

アロンの言葉で四人はフィールドを出て行く。さくらとケンは何も言わずその後姿を見つめた。さくらは四人の姿が消えるとケンを見た。

「とりあえず、ここから出ましょう。」

二人はすぐに今居るフィールドから出た。すると、その先には全く別のフィールドがあった。先ほどのフィールドから戻ったのならさくらのフィールドに入るはずである。しかし、今目の前にあるフィールドには橋も砂浜も無い。右手には岩山、目の前には大小様々な岩が転がっている。

「ここ、岩山だわ。前に入った事ある。」

さくらは言い終えると、はつとしてすぐにフィールドを出た。すると、今度は洞窟に入ることが出来た。広場に戻るか否かのウィンドウを消すとそのまま次のフィールドに向かって走った。次のフィールドを見たが先ほど入ったようなフィールドでは無く、海と島が見えるだけだ。つまり、先ほどの空間はもう既にここには無いということだ。少し遅れてケンが来る。

「さっきのフィールド。もう無いわ。なんだっただらう。」

少し次のフィールドを見るとさくらはケンを見た。

「とりあえずサポートに連絡しておくわ。」

さくらはメニューからサポートの問い合わせを選択する。表示された問い合わせフォームに今さっき起こったことを伝えた。仕様であるというのならば仕方が無い。しかし、運営側が気づかなかつたバグならば言うておいたほうが良いだらう。このゲームの今後ためにも。

さくらは一通り伝えるべきことを記述すると送信をクリックして画面を閉じた。

「連絡したわ。とりあえず広場に戻りましょう。ターゲット戦の開始時間も近いから。」

ケンが同意すると、二人はそれぞれ帰還を選択して自分の部屋へと戻った。

第十一話 ターゲット戦

第十一話 ターゲット戦

アロンたちは広場の一角にまとまって座り、蛇の居たフィールドについて話していた。

「やっぱり、さっきのフィールド。何か変だな。フィールド間の洞窟も見えなかった。」

アロンは寝転がり空を見る。空といつても作られた空であり、決まった形の雲が移動していくように見える。

「そうだな。それに二レベル差のプレイヤーが同じフィールドの空間に居るなんてどう考えてもおかしい。」

アロンの右隣に居るトマがアロンを見下ろす。しかし、すぐに目の前の地面に視線を戻した。

「公式に問い合わせておいた。ついでに公式のお知らせやその他情報も確認したけど関係するものは無かったよ。」

アロンの左隣に居るルイがアロンを見て、次にトマを見た。

「なんだっていいじゃんか。面白いものが見れたんだから。あんなでかいのなかなかお目にかかれないぜ。」

リッツはルイから反時計回りに順に仲間を見ていく。しかし、リッツを見たのはルイとアロンだけ。トマは相変わらず地面の一点を見ている。

「もし蛇を倒せなかったら、あそこで死んでいたらどうなっていたんだろうな。」

トマは地面を見たまま独り言のように言った。そこで、アロンは起き上がる。

「あれがもしこのゲームのバグだとしたら、何気ない動作で予想外の反応をするかもしれない。」

「例えばどんなの。」

アロンの言葉にルイが反応する。アロンはルイの言葉に空を見上げ、そしてルイを見た。

「ゲームのデータが消えるか破壊されるとか。」

ルイはアロンの言葉に驚き、一呼吸の後トマと同様に地面を見た。

「それじゃまるでホワイトブラスターだよ。恐ろしい。」

ルイの言葉に他の三人は力なく相槌を打つ。

ホワイトブラスター。それはレベル九以上のプレイヤーが居るフィールドに低確率で出現する凶悪なモンスター。プレイヤーが倒すか、モンスターが居るフィールドの持ち主がゲームを終了しない限り存在し続ける。このモンスターが凶悪と呼ばれる所以。それは、このモンスターに倒されるとフィールドに転送されてから今までのポイントすべてが吸い取られるという点である。一見おかしな設定にも取れるが、上位レベルのフィールドのみ低確率で出現するため上位レベルプレイヤーへのハンディキャップとも取れる。各レベルに合わせて強さは決められているためレベル九の強さが最低になる。ちなみに現在プレイヤーの最高レベルは十二らしい。モンスターの追加と共に少しずつではあるが上位レベルが出現してきている。「もうすぐターゲット戦だな。みんな必要なものは揃えてあるのか。」

アロンの言葉にそれぞれ答える。結果、全員回復薬等の品物は揃えているようだ。

「僕はちよつとトイレいつてくる。長引く可能性もあるから。」

ルイは他の三人に言うと、しばらく何も言わなくなった。アロンとリッツはその場に寝転がり、トマは黙ったまま地面の一点を見つめている。

「ただいま。」

しばらくしてルイが戻ってくる。他の三人が反応するとアロンは時計を見た。そして三人を見る。

「そろそろ始まるな。三人とも準備は良いか。」

アロンの言葉に他の三人は頷く。それからすぐにゲーム内にア
ナウンスが流れる。内容は今からターゲット戦をはじめるとい
うことだ。そして、すぐに転送までのカウントダウンが始まる。
転送までにカウントダウンを採用するのはゲーム内でもこのター
ゲット戦の時か脱出アイテムを使用した時だけだろう。長めに二
十秒のカウントの後画面が真っ白になる。そして、次の瞬間には
ターゲット戦用のフィールドに転送されていた。

専用フィールドは草木がほとんど無く、まるで砂漠の一角のよ
うに見えた。風が吹くたびに砂埃が舞い上がり、視界も悪い。

すぐに回りを確認し、トマ、リッツやルイが居ることを確認す
る。そして、戦闘前アナウンスが流れる。それとともに音楽が流
れ始めた。その音楽は余裕の無い緊迫した音楽であるように思
えた。

「巨大モンスター、ゲルフアウストが私たちの町に向かって侵
攻を開始しました。町を守るため、早急に退治してください。」

アナウンスの後すぐに画面が代わり、アロンたちを上空から映
す映像になる。前後には道がありどちらにも続いているように見
えた。しかし、背後の道の先は映されていない。背後に続く道が
町への道だろうと思う。視点が彼らの先にある道を映し進んでい
くと、ある位置で巨大なモンスターの一部が見えた。そこで視
点は巨大なモンスターを正面から映す。黒いボールのような丸
い体で所々青白い光を出している。丸い体の両側には長い腕が
ある。また、目は横長で顔は決してかわいいものではない。その
モンスターの回りには小さなモンスターがたくさん見える。視
点は巨大なモンスターを中心に一周する。その間に巨大なモ
ンスターは咆哮し、進み始めた。すると視点が各プレイヤーに
戻される。その直後再びアナウンスが流れた。

「ゲルフアウストが現在みなさんの居る位置を越えて町に侵
攻すると私たちの負けとなります。十分注意してください。」

アナウンスが始まると同時に行動可能となったため各プレイ
ヤーは早速動き出す。

「よし、倒しに行きますか。」

アロンの言葉で四人はゲルフアウストに向かって走り出した。周りに居た他のプレイヤーもそれぞれ走り始める。アロンは他三人と一緒に走り出したものの武器であるハンマーが重いのか速度が出ない。

「お前は一撃目の登場じゃないから後から来いよ。」

軽い武器を持つリッツとルイが遠ざかっていく。トマは速度を落としアロンに並んだ。

「お前も行けよ。俺は大丈夫だ。」

アロンの言葉にトマは笑う。手に持った槍を担ぎ、アロンを見た。

「お前だけでこの戦いを単独で切り抜けられると思っっているのか。」
アロンの武器はハンマーである。ハンマーという武器は一对一の場合は良いものの、一対複数の場合は不利になりやすい。トマはその点について心配しているのだ。

トマは前を向き、そして続ける。

「仲間が居るだろ。使わなきゃ損だ。」

トマはそれだけ言うつと最初の敵が現れるまで何も言わなくなつた。周りには同様に重い武器を持ったプレイヤーが戦場へ向かって走っている。アロンと同じハンマーを持ったプレイヤーや大きな大砲を持ったプレイヤーも居る。

その頃、双剣使いのリッツと弓使いのルイは敵の第一陣と戦闘を開始していた。現れたモンスターはどれも現在のレベルに出現するものばかりで一度戦っていればどうにかなる。しかし、そんなモンスターが複数同時に向かってきたのでは戦い方を知っていても簡単には倒せない。

リッツは器用に敵味方の間をすり抜けながら敵だけに攻撃を加え、押されている味方の手助けをする。見知らぬプレイヤーでも助

けなければ結果リッツを含むこのフィールドに居る他のプレイヤーが損をする。

プレイヤーが行動不能になった場合はこのフィールドに転送された時の位置に戻される。戻されれば戦線への復帰まで時間がかかってしまう。前線に居るプレイヤーが少なくなればなるほど各プレイヤーの負担は増大する。名前も知らないプレイヤーでもときには助け合わなければならない。このフィールドに居る時点でこの戦いに勝つという共通の目的を持つ仲間なのだから。

軽い近距離武器を持つプレイヤーが敵に直接攻撃を加え、軽い遠距離武器を持つプレイヤーが彼らを援護する。矢に当たり隙を見せたモンスターへと剣や双剣を持つプレイヤーが攻撃する。

リッツも同様にモンスターへの攻撃をしていたがその真横から別のモンスターが突進してきた。モンスターにぶつかった彼は別の位置へと飛ばされる。

リッツは飛ばされた先でゆっくりと立ち上がる。近くには同様に飛ばされたプレイヤーが何人か居た。すぐに周りを見ると彼らを狙う複数の人型モンスターが囲むように近づいてきていた。このままでは袋のねずみとなってしまう。リッツはすぐに走り出す。そして、二体のモンスターの間へ向かっていく。モンスターを切りつけて通れる隙間を作り出そうとした。一緒に居るほかのプレイヤーも意図を理解して一緒に攻撃して出ようと試みるがうまく隙間が出来ず出られない。その間にもモンスターたちはリッツたちを囲み狭めていく。外から矢が飛んできていることはわかったがその程度の攻撃では何も変わらない。焼け石に水である。

さらに狭まる中、遠くで爆発音が鳴った。さらに続けて爆発音。三度目の爆発音の後、目の前のモンスターの頭に何かが命中し爆発を起こした。爆発を受けたモンスターはその場に倒れる。一体が倒れたことにより囲いの一角が空く。リッツたちはそこから囲いの外へ出た。正面には大砲を持ったプレイヤーたちがモンスターに向けて標準を合わせ撃っていた。

「やっと大砲、大砲が来たのか。」

大砲は正式にはヘビーガンと呼ばれる重い武器に分類される。つまり、後続のプレイヤーたちが到着したことを表す。

リッツたちが大砲を持つプレイヤーたちに向かって走ると彼らの間からハンマーや大剣を持ったプレイヤーが出てくる。その中にはアロンやトマも居た。

「後は任せる。」

彼らは口々にそう告げると重い武器を持ったプレイヤーたちはモンスターへと向かっていく。リッツたちはそのまま大砲を持つプレイヤーの間を通過して前線を離脱した。

リッツは大砲の壁を見ながら回復薬を使って体勢を立て直す。その傍にレイが来た。

「リッツ。大丈夫。」

レイは袋から液体のビンを取り出して腰に付いた空のビンと交換している。

リッツは現実世界の彼自身もお疲れのようで体力を回復したもののなかなか動き出さない。

「じゃあ、僕は戻るから。」

レイが走り出そうとしたとき、リッツが引き止める。リッツは立ち上がるとレイを見た。

「お前、手投げ爆弾とか持ってるか。あつたら俺に全部渡せ。」

レイは現状のためか黙って手持ちの爆弾をすべて渡す。

「いいか、お前は前に出るな。お前は、援護だ。」

リッツはそれだけ言うのと再びモンスターに向かって走り出した。その後姿を見たレイは、矢筒から矢を取り出すと腰に付けた液体に矢の先端を漬け、弓を引きモンスターに狙いを定めた。先端から滴る液体、その先に居るモンスター。狙いが定まったとき、彼は矢を放った。

大砲の玉と矢がモンスターと近距離で戦うプレイヤー達の援護をする。

ルイは空になった矢筒に矢を装填している。その間も敵のほうを何度も見る。矢を装填し終わると、一本取り出して番えた。そして、狙いを定めるために敵のほうを見たとき彼の目は見開かれた。砂埃の舞う中、黒い物体がゆっくりと姿を現し始めたのだ。

「ゲルファウストだ。」

直後、ゲルファウストの咆哮が戦場を駆け抜けた。

第十二話　ゲルファウスト

第十二話　ゲルファウスト

アロン、トマや他の重い武器を持つプレイヤーたちは遅れて戦場に到着する。現状はきわめて厳しいものであった。軽い武器はそれ自体が小さい武器であるため攻撃力が低い。そのため複数のモンスターを相手にした場合、各モンスターを倒すまでに時間がかかってしまう。そのため、攻撃をした複数モンスターに追われるプレイヤーも少なくない。

アロンたちは、まるでモンスターが壁と化した現状を見て動けなくなっていた。

「さてと、出番だな。」

大砲を持つプレイヤーたちはそれぞれが自前の大砲に玉を込め、壁のように並ぶモンスター達に標準を合わせる。

誰かが指揮を執るわけではないため、準備が出来た順に放つていった。

至近距離で聞こえる爆発音、飛び出した玉が目標に命中したときに聞こえる爆発音が戦場に響く。すると、モンスターの壁が少しずつ崩れていく。その中から数人のプレイヤーたちがこちらに向かって出てきた。

「行くぞ。トマ。」

アロンはモンスターの間から出てくるプレイヤーたちに向かって走り出した。

モンスターの間から出てきたプレイヤーたちと交差する際、アロンはその中にリッツの姿を確認する。

「後は任せる。」

アロンはひとりでに言っていた。後続のプレイヤーの中にも同様に彼らに言っている者も居る。

アロンは一番近くに居たモンスターへと近づき手持ちのハンマーを思い切り振り上げた。彼の攻撃を受け、硬そうな皮膚を持つ形容しがたいモンスターは後方へと倒れる。近くに居た別の方向を見ているモンスターにもハンマーを振る。水平に振るハンマーの衝撃によりモンスターは衝撃を受けてよろける。しかし、倒れない。そこへ見ず知らずの剣を持つプレイヤーが切りかかり止めを刺した。アロンは新たなモンスターを探して周りを見渡す。すると倒れたモンスターが今まさに起き上がろうとしていた。彼は早速近づき、倒れたモンスターへと追い討ちをかける。振り上げたハンマーに全体重をかけて叩きつけた。その間に彼を攻撃してくるモンスターは他に居なかった。プレイヤーの数が増えたために一人に対するモンスターの数が少なくなっているのかもしれない。もしくは、襲ってきたモンスターのほとんどを倒してしまったのだろうか。

トマを見れば槍でモンスターにとどめを刺していた。モンスターに刺さった槍を足で抑えて無理やり引き抜く。

アロンの近くで大砲とは違う爆発音がする。音がした方向を見ると、砂埃の舞う中から黒く大きなモンスターがゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

「ボスが来たか。」

直後ゲルファウストは戦場へと咆哮した。高音では無いものの大音量であるため耳を塞ぎたくなる。アロンは腰を落とし、音が消えるまで耐えた。音が消えると、彼は手持ちのハンマーを肩に担ぐ。

「大丈夫か。」

トマがアロンの傍に来た。反対側からはリッツが来る。袋が異様に大きいのはなぜだろう。聞く暇など無さそうなので聞かないことにした。

砂埃から姿を現したゲルファウスト。真っ黒く丸い体をしており、体のところどころが青白く光っている。そのゲルファウストが直後体を前に倒した。すると、背中に火山の噴火口のようなものが見える。戦闘開始時から存在したと思うが、開始時に見た映像の中で

は一瞬しか背中を写していないために気が付かなかった。ゲルファウストは体を膨らませたままじっとしている。

「いまだ。行くぞ。」

攻撃してこないために自ら攻撃をしかけようと、アロンたちや同じフィールドで戦うプレイヤーたちはゲルファウストへ向かって走った。大砲や弓を持つプレイヤーは遠距離からゲルファウスト本体へと攻撃を開始する。

すると、突如ゲルファウストの噴火口から複数のモンスターが飛び出してきた。そして、アロンたちプレイヤーに着地していく。それとともにゲルファウストの体はしばみ通常の大きさへと戻っていく。

「味方を作るのかよ。」

アロン、トマとリッツは目の前に着地したモンスターによって急停止する。モンスターは人型で両手に持った剣を振りながら近づいてくる。まるで忍者のような身のこなしだ。アロンたちも急な登場に防御することがやっとならなくて反撃することができない。忍者のようなモンスターはゲルファウストとプレイヤーたちとの距離を少しずつ開けていく。

忍者のようなモンスターがアロンに剣を振り下ろす。彼はハンマーの柄を使って剣を受け止めた。

「アロン離れる。」

アロンはその声に従いモンスターから離れた。すると、直後モンスターが爆発する。周りを見れば、手投げ爆弾を持ったリッツが居る。リッツの行動から袋の中に入っていたものが爆弾であった事がわかる。アロンがそのように考えている間にトマがとどめを刺した。周りのモンスターも複数人が同時に攻撃を与えることでこちらのペースになり、やがて地面に倒れた。

全員が消えていくモンスターを踏みつけながらゲルファウストに近づく。ゲルファウストは再度体を丸めて新しいモンスターを出そうとする。しかし、プレイヤー側の攻撃力の合計が高いのか体を

丸めようとしても攻撃によって動作をキャンセルされモンスターを作り出すことが出来ない。せいぜい長い腕を振り回してプレイヤーを攻撃しながら飛ばすぐらいである。何度も何度も腕でプレイヤーたちを払いのけすくい上げ弾き飛ばすものの、ゲルファウストはプレイヤーたちの的となり集中攻撃を受けた。

アロンたちもゲルファウストの腕をよけながら本体へと攻撃を仕掛けていく。リッツに関しては袋に入った爆弾を小出しで本体へと投げていく。爆発音とゲルファウストの悲鳴に近い咆哮がフィールドに広がる中、勝負がつくまで集団で攻撃を続けた。

その中で攻撃を受けて開始地点に戻されるプレイヤーも沢山居た。目に見えて戦場から減っていくプレイヤーの数。減れば減るほど残ったプレイヤーたちの攻撃は増していった。

しばらくすると、ゲルファウストの動きが鈍くなりついにはその場に倒れて消えてしまった。

ゲルファウストが消えると、すぐに勝利の音楽が流れ画面上に勝利したことが表示された。そして、自動的に帰還までのカウントダウンが始まる。カウントがゼロになると画面が真っ白になり次の瞬間には自室に戻っていた。アロンはすぐに自室を出て広場にて仲間を待った。アロンたちは毎回ターゲット戦後に必ず集まるようにしている。

その時、突然外部から携帯電話の着信音が聞こえてきた。

「なんだよ。こんな時間に。」

祐樹はアロンの操作をやめるとヘッドマウントディスプレイをはずして相手を確認する。相手は母親のようだ。彼は通話を開始した。

「こんな遅くに悪いけど。今度学生証のコピー送ってくれない。」

祐樹の耳に入ってきたのはそんな言葉だった。そして、ある事を思い出す。学生証のコピーは毎年この時期に送っている。何時も通り年金関係の事だろう。二十歳を越えた学生も大変である。しかも相手はお役所だ。気が進まない。しかし、送らないと面倒ごとが起

きる。

「明日コピーして送るよ。」

祐樹はそれから最近の現状を説明して通話を切った。息を吐きながら座椅子寄りかかる。祐樹は通常の椅子では無く座椅子に座っている。何故ならPC本体が足の短いテーブルに載っているからである。背伸びをすると再びヘッドマウントディスプレイを装着した。ゲーム内では既にトマ、リッツやルイが集まり何度かアロンを呼んでいた。祐樹はすぐにアロンを操作した。

「悪い悪い。親から急な電話があつてね。」

アロンは三人を見る。彼らの動作から三人とも理解したようだ。「まだログアウトしないなら、これから通常フィールドで戦わないか。」

トマが今後の行動を提案する。時計を見ればまだ眠る時間では無い。今からなら幾つかフィールドを回れるだろう。

「俺は付き合うよ。ただし今日中にログアウトするからな。」

アロンはトマの隣に立ちリッツとルイを見る。

「僕は明日早いからこれで終わりにするよ。」

ルイはアロンとトマに言った。そしてリッツを見る。つられてアロンもトマもリッツを見た。リッツは三人の顔をそれぞれ見る。残りはリッツだけなので無言の圧力が彼にかかり始めているのかもしれない。そして、彼は首を横に振る。

「今日はやめとくわ。」

リッツとルイは不参加となり、四人はその場で別れた。

アロンとトマは二人を見送ると、ゲートへ向かって歩き出した。

第十三話 反逆児の言葉

第十三話 反逆児の言葉

祐樹は研究室の扉を開く。

「おはようございます。春間さん。」

研究室に入ればサーバー音と共に後輩の声が聞こえてくる。

春間は情報系の大学院に通う学生である。彼は挨拶をしつつ自分の席に荷物を置いた。

キーボードを軽く叩くもパスワード画面が出てこない。そこで春間は昨日帰宅時に電源を落とした事を思い出す。しゃがみこんで電源のスイッチを押した。しばらくするとBIOS起動画面の後自動的にLinuxが起動する。数十秒でログイン画面に到着するとログイン名とパスワードを入力して入った。そして、コンソールとブラウザを開いて作業を始める。作業といっても既存のプログラムの変更と報告書の作成ぐらいである。

春間はしばらくして作業を中断し、自分のコップを洗って冷蔵庫の中にある天然水を注いだ。

「春間さん。これ見てくださいよ。」

隣の席に居る後輩の声に、春間はコップに入った水を飲みながら彼のディスプレイを見る。そこには掲示板が表示されていて、マスコミのどうしようもない印象操作、捏造、やらせ、偏向報道や放送事故を装った真実の隠蔽に対する突っ込みが書かれていた。所々で反論があるが如何せん事実らしいので仕方が無い。反論されたくなかつたらきちんとして放送する事である。ゴミと呼ばれる所以がここにあるといえよう。

春間のため息まじりに何度か頷くと自分のディスプレイの前に戻った。コップに残った水を飲み干すと中断していた作業を再開する。

春間は作業をしながら、先ほど見た掲示板について考えた。

あのような事は国内だけでは無いのだ。海外からもこの国を文化侵略しようとする国が存在する。取り合わない事が最善の策ではあるが、他国文化の起源主張を始めると正しい資料を提示しない限り海外の人間はその情報を鵜呑みにしてしまう。厄介だ、実に厄介である。

それを避けるために人々は各掲示板、動画投稿サイトにて主張している場合は英語でコメントを残しソースを提示するように求めている。春間自身もたまに突撃することがある。その行為自体が面白いからだ。しかし、ソースを提示せよと言ってもそれらは出てこない。ただ言葉だけで反論するだけだ。何故ならば初めからそんなものは存在しないのだから。攻めれば攻めるほどぼろを出すかコメントを拒否する。コメントを拒否するなんて反論出来ませんと言っているようなものである。反論出来る資料が在るのならば拒否する理由がわからない。

しかし、それをこの国の民は何も知らない。ネットワークを介して攻撃されているというのにおめでたい事である。しかも世間ではあの国と「仲良くね」と言う流れを作っている。相手国に不利な事件があれば音声だけ切って放送事故にするなんて常套手段だ。そのような事をしていて暇があったら親しい国ともっと仲良くなることである。

政府に関しては人口の減少、既に無理な年金問題、老後の福祉、やると言いながら決定打が打てない政策なんていくつもある。所詮自分の任期に特に何も起きなければ良いという考えなのかも知れない。自分のした罪から逃れるために自ら死を選ぶ政治家なんて、困ったら逃げるの考え方である。それをマスコミがあまり放送しない事に問題がある。タチが悪い。都合の悪い事は全部闇の中だ。

ネット上ではそんな馬鹿な人間たちに抵抗しようとする人たちも居る。しかし、人生長く生きたほうが偉いという考えから年配の人たちはテレビ、ラジオ、新聞で得た情報を信じて春間たちに押し

付けてくる。この国は何時か内側から崩壊するだろう。いや、既に始まっているのかも知れない。

春間は大きく深呼吸をして立ち上がると冷蔵庫に入っている天然水を自前のコップに注いだ。水を一口飲むと体の中に冷たい液体が流れていく感触を感じる。水を飲み干すと窓から外を見た。太陽が西に沈み始めていた。

春間は再度コップに水を注ぐと、自分のPCの傍に置いて作業を再開した。

いよいよ外も暗くなり、研究室内の後輩たちもいつの間にか少なくなっていた。

春間はきりの良いところで作業を終了させ、荷物をまとめた。

「じゃあ、お疲れ様。」

荷物を持って研究室を出る。

「おつかれさまです。」

春間の背後から後輩たちの声が聞こえる。彼はその声を聴きながらそのまま研究室を出た。大学を出て自宅への道を歩く。前を見れば会社帰りのサラリーマンや大学生に見える男性が歩きながらタバコを吸っている。すぐにタバコの煙が彼の喉に侵入した。同じ方向を向かって歩いている場合、相手が前に居ると、ずっと煙を吸うことになってしまう。春間は早足で歩きながらタバコを吸う輩を追い越して歩いた。春間はタバコが嫌いである。煙を吸い込んだだけで気持ち悪くなるほどだ。研究室内の人間の中にはタバコの煙が駄目と言っただけでかわいそうな発言をする人間が居る。春間に言わせればタバコが嫌いで何が悪いというのだろう。今や電車や新幹線も全車両禁煙である。タバコは個人で楽しむ分には良いと思う。しかし、吸うときに広がる煙によって気持ち悪くなったり体調を崩す人間が世の中に居る事を理解してほしいところだ。そんなこともしらず我が物顔で歩きながらタバコを吸う人間に良い印象は持てない。

春間はタバコの煙から遠ざかり通常の空気が吸えるようになる。と落ち着いた。彼は自宅に戻ると食事を作り一人で食べる。一人暮

らしを始めて長いが寂しさは感じない。

そして、彼はパソコンを起動し、「ネットワークレジスタンス」を起動する。何故このゲームをするのかは自分にも良く分からない。名前にレジスタンスが入っているからだろうか。レジスタンスとは権力や侵略者などに対する抵抗運動もしくは抵抗という意味である。今の春間にぴったりな単語だ。つまり、タイトルはネットワーク上の抵抗もしくは抵抗運動という意味だろうか。このゲーム自体がネットワーク上の抵抗なのか、それとも抵抗運動を行うソフトウェアなのかは分からない。ただ一つ言える事は、ゲーム内でも春間たちは何かに抵抗しているのである。

「さてと、今日も戦ってきますか。」

そしてアロンは自室へと転送された。その姿を見て、春間はふと思う。

この国は今守るべき相手、戦うべき相手が誰なのか本当に分かっているのだろうか。

第十四話 厄介事と電気街

第十四話 厄介事と電気街

佐々木は大塚の研究室へのドアを勢い良く開いて中に入った。先ほど自分のコンピュータにて確認した質問の中に興味深いものがあったからである。既に大塚のほうに内容は送ってある。直接尋ねるのはその内容が稀であり、重要と判断出来るからである。彼は研究室内に入るとそのまま大塚の前へと進んだ。

「大塚さん。例の質問文読みましたか。」

大塚はじつとディスプレイを見ている。そこには佐々木が先ほど見た質問内容があった。

内容は今まで見たことの無いフィールドに出くわしたこと。ここでは二レベル差の二つのパーティが同時に同じフィールドで戦うことになったこと。フィールド間の洞窟が存在しなかったこと。これらの現象がプログラム側の不具合なのかどうかについての質問だった。

「外からの不正も考えられるな。」

大塚が佐々木を見る。質問で語られているフィールドは大塚たちが作成したものは無い。その中で出現したモンスターも同じである。一レベル差の二つのパーティが同じフィールドで同時に戦うことは可能であるが二レベル差はシステム上現時点では不可能である。また、必ず各フィールド間は洞窟で繋がっているため、洞窟が存在しないということは通常のフィールドでないと考えられる。

「ユーザには今回の事はプログラムの不具合であり早急に対処すると回答しておきます。再び同じことが起きる前に本物を見つけて対処しましょう。私も研究会の準備の合間に調べてみます。」

大塚は佐々木の言葉に頷き、研究室内に居るほかの研究者を見る。各研究者も大塚を向き頷く。そして、各人それぞれの仕事に戻る。

った。

佐々木も自分の研究室に戻り、締め切りの近い研究会用の原稿を書き始めた。すべき事を一言で表すことが出来るものの、その行為は意外と時間を費やすものである。

記述する内容は今回の研究についての目的、理論、手法とそれを用いた評価実験の結果、考察と課題である。実験データとそれをプログラムに投げて返ってきた結果はある。あとはそれらのデータを表にして、自分たちの手法で既存手法よりもこれくらい精度が良くなったと言えば良い。原稿はこれくらいである。あとは本番当日に使用するスライドの作成と偉い人たちからの質問攻めへの対処だ。「それって意味ないよね。」などと言われては今まで研究をしてきた意味が無い。重箱の隅をつつくような突っ込みにも気をつける必要がある。考えるべき内容はいろいろとあるのだ。しかし、今は原稿を仕上げるだけで十分である。佐々木は画面上に表示された結果を見ながら、原稿を書いていった。

ドアをノックする音が聞こえる。佐々木はディスプレイを見たまま声だけで対応した。

「佐々木居るか。入るぞ。」

声から荒谷であることはわかった。そこで初めてドアを見る。ドアの前には案の定荒谷が立っていた。

「忙しいのか。こんな遅くまで居て。」

荒谷の言葉にはっとして時計を見る。既に八時を越えて九時になろうとしていた。

「研究会用の原稿を書いていたんだよ。締め切りが近いんでね。」

佐々木はそばに置いたコーヒーを一口飲む。冷たくてまるでアイスコーヒーと化していた。一気に飲み干してカップを空にする。「そうか、頑張れよ。」

荒谷はそれだけ言つとドアを開けて研究室を出ようとした。す

ると、彼はそこで止まり佐々木を見る。

「原稿出した後で時間が空いたら秋葉原行かないか。」

佐々木は最近行っていないためかなんだか恋しくなっていた。たまには裏通りのパーツ屋やジャンクも見たくなる。

「そうだな。時間が空いたらな。」

荒谷は佐々木に頷くと研究室を出ていった。佐々木はすぐにディスプレイを見てキーを叩き始めた。

電車が止まる音、人で埋め尽くされたホーム。秋葉原駅はホームが各階にあり一階には改札口がある。エスカレーターを降りて改札を抜けると電気街。いや、今や聖地と呼ばれる地がある。なんの聖地かは佐々木と荒谷には分からない。二人とも基本的に電気街として見ているためである。北口を出ればメイドさんがチラシ配り、少し進めば何時も閉店セールと声を上げて時計やアクセサリを売っている人たちが居る。何度も来ていたためか、何時ものことだと思つてその場を通り過ぎる。そして、大通りへと出た。やはり、日曜日の大通りは混沌という言葉が似合う。一度は歩行者天国がある事件で中止されたもののしばらくの後再開された。歩行者天国の無い日曜日の大通りなんて秋葉原らしくないと言いやうが無い。それにいちいち信号待ちも面倒である。佐々木は道路の真ん中にたつて周りを見る。表現しがたい快感が佐々木の中を満たす。そこへ、背後から声がした。

「勝手に意識だけどっか行くな。日曜は面倒なんだからさっさと奥に行こう。」

佐々木が振り返ると荒谷が居た。佐々木は頷くと、大通りから裏通りへと入った。大通りよりも人数が減り、カードやディスクといったメディア類の値段に吸い寄せられる人たちを横目にさらに奥に向かう。すると、ある位置で周りに居る人の数が激減した。やはり、この先に用ある人間は限られているということだろうか。二人

が着いた場所は電子部品の店である。例えばオペアンプやトランジスタ、ダイオードといったものである。正直確固たる目的を持った人間以外はこの店の中に入らないだろう。それに何時も混んでいる。「ちよつと行ってくる。その辺で待っていてくれ。」

荒谷は佐々木にそれだけ言っていると、混みあう店内に突撃した。佐々木は店の前で荒谷が戻るまで待つことにした。彼も何か作る対象があるのなら店の中に突撃することも考えられるが、あいにく現在新たに必要なものは無い。

荒谷を待つ間、少し前に起きた不正について思い出した。あれから接続してくるアドレスを片っ端から収集して怪しいものを当たっていったが特に当たりは見つからなかった。あれ以来ユーザからの報告は無く、一時の不具合として片付けられそうである。報告はターゲット戦直前であり、それ以降報告が無い。だとすると、ターゲット戦の相手が行っていたとも考えられる。だとしたら、ナイスタイミングである。あとは研究会を無事に終わらせる事が出来ればうれしいところである。

「おまたせ。」

佐々木が声のするほうを見れば、荒谷が袋を持って店を出てきた。二人はそれから各PCパーツ店を回り、最終的にジャンク通りを覗いて末広駅まで到達する。ジャンク通りは文字通りジャンク品が大量にある通りである。メモリやHDD無しのノートPCが大量にあり、その中から良さそうなものを探す。ここでは荒谷の代わりに佐々木が動き回る。通りの両側にある店を行ったりきたりしてお宝を探すのだ。

「俺はこの辺りで待ってるよ。ゆっくり探してきな。」

荒谷はそれだけ言っていると佐々木から離れた。佐々木はそれを確認すると再びお宝探しを再開した。ジャンクとして並べられているものうまくすれば動く。というか安くて動かないと書いてあるのに簡単に動くものもある。よく分からない世界だ。本当にお宝としか言いようが無い。偶然見つけた黒いノートPCにあえてフラッシュ

ドライブを積んでみたのも良い思いである。今や大容量化低価格となったフラッシュドライブもその頃は発売したばかりで値段も容量も今思えば仰天ものであった。やはり時代が変われば周りのものも変わるのである。

佐々木は店の中を歩き回っていると、あるものに目を奪われる。デジタルビデオカメラである。しかし、電源入らないと書いてある。ワンコインぐらいなので駄目なら分解して遊ぼうと考え購入する。動くかどうかわくわくものである。

佐々木は袋片手に店を出て荒谷を探す。彼はすぐに見つかった。彼は通りを行きかう人たちをただじつと見ていた。佐々木は長く買っ物をしていたのかと思い、走って近づぐ。

「ごめん。長かったか。」

佐々木の言葉に荒谷は首を振る。彼は通りを行きかう人々を観察していたというのだ。彼の行っている研究に新たな要素として追加しているかと考えているのかもしれない。

二人はそれから海鮮丼を食べると電車で戻った。お互い品物にお金をかけすぎて手持ちが無いという状態になっていた。使うお金、使える道があることは良いことである。

「そっぴや、お前のとこで作っているゲームやってみたよ。あれって意外と面白いのな。」

電車の音の中、荒谷の声が佐々木の耳に聞こえてくる。正直予想外であった。荒谷はゲームのことを知っているが、実際に遊んでみるとは思っていなかったのだ。

「そんなに暇なのかよ。することしつかりしろ。」

ゲームをすることは悪くない。しかし、それによって何か大切なものを失うことは良くない。ならば、すべてのことには何かしら得があると考えていれば、無駄に思える行為も何かの糧になるだろう。「俺はやめるよ。俺はな。」

荒谷は窓の外に広がる景色を見ながら言った。佐々木は荒谷の「俺はな。」という言葉が気になった。しかし、世界に居る他のユ

ーザのことを言っていると思い、それ以上の詮索は止めた。

第十五話 白い悪魔

第十五話 白い悪魔

アロンたちは通常フィールドにてモンスターと戦っていた。軽い武器を持つリッツとルイが先制攻撃を与え、敵が隙を見せた瞬間にアロンとトマが同時に攻撃を仕掛ける。複数人で戦うがための戦術。この攻撃方法がアロンを含め、全員が良いと感じている。

「さてと、次に行くか。」

アロンは重いハンマーを背負って走り出す。それでも、後から走り出したリッツやルイに追い抜かれるのは必然だ。武器とはいっても良い面と悪い面を持ち合わせるものである。

四人はそれから何体かモンスターを倒すと、フィールドの出口から出る。洞窟に入り、次のフィールドに入った。

そこは雪山だった。風と共に雪が舞い、視界を白く染める。ゲームの中なので寒くは無いが、実際にこんなところに居たら寒さでどうかしてしまうだろう。

「今日は特に荒れてるみたいだ。」

ルイが一人つぶやく。視界が悪いために、背後からモンスターに襲われてもおかしくない。面倒な状況である。それでも、四人ともここで引き返す気は無い。武器を構えて、白く染まった世界に突入する。地面も山肌も、すべてが白い。どこからが地面で何処からが地面でないのかも分からない。

アロンが前に足を出したとき、足が地面に吸い込まれていく感覚を味わう。慌てて反対側の足に体重を移動させつつ両手でバランスをとった。突然のことだったためかびっくりして声を上げてしまう。その声に気が付いたほかの三人が彼の傍に来る。

「危なかったな。落ちてりゃ先に広場行きだぞ。」

リッツがアロンの腕を持つ。反対側をトマが持ち、彼を立たせ

た。彼は立つと、今自分の足が吸い込まれた地面を見る。よく見なければ分からないほど地面とそれ以外の差が無い。彼はここではあまり敵と戦いたくないと思った。

四人は走ることをやめて歩き出した。走って崖からダイブは面倒である。歩けば崖からの転落もある程度防げるだろう。しばらく歩くと、白い中から突然何かが現れた。四人とも、何かにぶつかり地面に転がる。起き上がれば、白い中に真っ白いモンスターが居た。ライオンのような姿で、毛が沢山ある。

「ふざけやがって。」

アロンは敵に近づき、ハンマーを振り下ろす。すぐに反撃を受けるが、彼は気にしない。四人が同時に攻撃するからだ。その通り、すぐに他の三人も攻撃を始める。攻撃を受けたモンスターの体が赤く染まっていく。それは白い世界の中で一際目立った。その赤い体を目印に、四人は少しずつ、確実に攻撃を加えていった。数回の攻撃の後、敵は絶叫とともに倒れ、消えてしまった。四人それぞれが突然現れた敵に勝利したことを安堵した。視界の悪さのせいで、通常倒せる敵も倒せないということも起こりそうである。四人が再び歩き出すと、目の前に何かが見えた。さらに近づくと、洞窟の入り口のようなだった。ここから中に入れるようだ。中にモンスターが居るだろう。しかし、白くて何も見えない状態よりは格段に楽になる。四人は洞窟の入り口に向かって走った。

洞窟に入ると、先ほどよりも周りが見えるようになり、安心感が生まれた。やはり、雪が舞う日に外を出歩いてはいけなと思う。洞窟内は広く、誰かが掘った形跡が所々にある。そして、まっすぐに伸びた道には横道がいくつもあった。今彼らが居る道はまっすぐ伸びているわけではなく、見える距離に丁字路がある。

「丁字路ね。あんまり良い思い出が無いな。」

アロンはそう言いつつ歩き出す。中を歩き回れば反対側に出られる道があるかもしれない。ゲームならばなおさらその可能性が高い。他三人も後に続いた。丁字路を右に曲がり、さらに歩く。途中

でモンスターにあつたが、先制攻撃とアロンの一撃でなんとか倒すことが出来た。幾つかの角を曲がり、歩き続けると、出口が見えた。ルイが他三人を抜いていち早く洞窟の出口に到達する。

「出口だよ。これで出られる。」

ルイはうれしそうである。他三人も出口に到着し、洞窟を出た。外は風の無い晴れた雪山だった。先ほど洞窟に入る前の場所とは大きく違う。視界は晴れていて、どこまでが地面なのかも分かった。早速、敵がこちらに向かってきた。敵は先ほど視界の悪い中戦った白いライオンのようなモンスターである。四人は慌てることなく仕留める。視界さえ晴れていけば倒すことも難しくは無い。それに四人なのだ。簡単に倒されては困る。

「おい、あれって出口じゃないか。」

リッツが指差す先にフィールドの出入り口が見えた。あそこから出れば次のフィールドに行ける。四人ともこのフィールドに長居する気は無い。彼らはすぐにフィールドの出口に向かって走り出した。

四人が走るほど出口は近づき、あと十数歩で到達するところまで来た。しかし、そこで彼らは立ち止まる。聞いてはいけない咆哮を聞いてしまったからである。彼らは振り返る。先ほど彼らが出てきた洞窟の出口付近に白く大きなモンスターが居た。その姿にアロンの言葉を失う。目の前の状況を必死に否定しようとした。

「嘘だろ。なんでここに居るんだよ。」

トマの震えた声が聞こえると同時に、モンスターは四人に向かってきた。彼らは二人ずつに分かれてモンスターの横をすり抜ける。モンスターは急停止し、こちらを向く。それは真っ白い毛をまとった大きな猿。その名はホワイトブラスター。ゲーム内では白い悪魔とも呼ばれているモンスターである。

「どうなっただよ。馬鹿野郎。」

四人はそれぞれ武器を構えてホワイトブラスターと対峙する。彼らは全員レベル七。ホワイトブラスターの出現レベルは九以上。

通常会うはずの無いモンスターが、目の前にあるフィールドの出口を塞いでいる。倒すか、倒されるか。道は二つしか無い。

ホワイトブラスターは前方に飛びながら前足を振った。四人はそれぞれかわして攻撃を始めた。ルイについては遠くからの狙い撃ち。他三人は至近距離からの攻撃。攻撃を受けながらも反撃を繰り返す。たまに思い出したかのように放つ咆哮は行動取り消しおよび一定時間のコントロール不能を引き起こす。その間に狙いを定めて攻撃をしてくるホワイトブラスター。

アロンは相手に勝てるかどうかでは無く、勝つという気持ちで武器を振った。体力が無くなった者は後退して回復薬を使う。隙が大きい回復動作は、一人で行う戦闘では重要な問題になる。しかし、今は四人のパーティだ。誰かが回復をしている間に他のプレイヤーが敵に攻撃を加えれば、敵から攻撃されることも無い。

四人それぞれがホワイトブラスターに攻撃を加える。しかし、相手は攻撃を受けている最中でも前足を振り下ろして攻撃してくる。敵の攻撃を受けて後方に飛ばされる仲間。体力が減ってきたためか凶暴化するモンスター。回復薬を切らして、戦闘不能になるトマ。アロンも思い切りハンマーを振り下ろした後、吹き飛ばされて戦闘不能になってしまった。すぐに画面が自分を後方から写す視点に変わる。この視点になったときはもう戦闘できないということである。春間は表示された帰還ウィンドウを画面の横に追いやって、未だ続くホワイトブラスターとの戦闘を見た。残っているのはリッツとルイだけのようだ。

ホワイトブラスターはルイに向かって飛んだ。ルイはすぐに逃げようとしたが、間に合わず。そのまま一撃を受けて戦闘不能になってしまった。残りはリッツのみ。

良く見ると、ホワイトブラスターがルイに近づいたためにリッツのほうフィールドの出口に近い。

リッツは立ち止まり、ホワイトブラスターを見る。その姿にアロンは何か嫌な予感がした。リッツは動き出し、出口に向かう。

「おい、逃げるな。」

アロンは無意識のうちに叫んでいた。仲間三人が倒されたのだ。ここまで来たら逃げずに最後まで戦ったほうが格好いいと思う。しかし、リッツは逃げた。そして、出口からフィールドを出た。

「ふざけんな。戻って来い。」

トマも叫んでいた。モンスターを恐れて逃げていく姿は今まで見た中で一番格好悪いものだった。その後ろをホワイトブラスターが追いかける。

「相手がフィールド外に出たのに。追いかけられるのか。」

トマの言葉を認識している間に、ホワイトブラスターは出口からフィールドを出て行った。モンスターもフィールド移動が出来るということらしい。初め見る光景に説明しがたい感覚を味わう。

「俺たちは広場に集まるう。」

アロンの言葉で、彼を含む三人はそれぞれ自室へと帰還した。

リッツはフィールド間の洞窟を走っていた。洞窟に入っても帰還ウィンドウは表示されない。それはモンスターに見つかっているからである。彼はそのまま次のフィールドに入った。

リッツが新たに入ったフィールドは砂漠だった。彼は砂にバランスを崩しながらも必死に走る。彼の背後から咆哮が聞こえる。ホワイトブラスターが追いかけてきたのである。彼は前方を見る。すると、一人のプレイヤーが見えた。

「助けて、助けてくれ。」

リッツは叫ぶ。前方に見えるプレイヤーがこちらに気づいて近づいてくる。リッツは安心したのか速度を落としてしまう。直後彼の背後から一際大きな咆哮が聞こえる。彼は驚き振り向こうとする。しかし、振り向くよりも早く、その背中にホワイトブラスターの腕がぶつかる。彼は衝撃で空を舞い、砂の中に落ちた。そして、動かなくなる。

ホワイトブラスターの前に一人のプレイヤーが居る。砂漠には暑苦しい黒い鎧を着けた剣士だ。ホワイトブラスターは目の前に居る剣士に威嚇した。彼はすぐに剣を抜き、構える。

「お前は何人戦闘不能にしたんだ。」

剣士がそう言った直後、ホワイトブラスターは前足を彼に振り下ろす。しかし、それよりも早く彼の剣がモンスターの体を斬っていた。モンスターは倒れ、すぐに消えてしまった。彼は先ほど倒れたリッツを探した。しかし、既に帰還したらしく、そこには居なかった。

「聞きたいことが幾つかあったのに。」

剣士は残念そうに、辺りを見回した。

第十六話 テストプレイヤー

第十六話 テストプレイヤー

菅谷は大塚の研究室に入る。彼は大塚の研究室にてゲームのメンテナンスとテストプレイを行っている一人だ。彼は室内に居る大塚や同僚への挨拶を済ませると、自分の席に座る。そこへ大塚が近づき、新種のリストを渡した。

「来てすぐに悪いけど。このモンスターたちでテストをしてくださいね。」

菅谷は大塚に頷くと受け取ったリストを見る。リストには発見された日、攻撃対象と予定のレベルが記載されている。彼はリストをデスクに置くとヘッドマウントディスプレイを被った。ディスプレイに表示される画面にテスト用のログイン画面を呼び出す。見た目は通常のログイン画面とさほど変わらないが、専用のユーザー名とパスワードを必要とする。

菅谷がログインすると、ゲーム内の自室に転送される。彼のキャラクター名はケイト。当初はテストといういかにもテスト用の名前が付けられていた。名前が変わったのは現行のゲーム内で見回りを出来るようにしたためである。ケイトは剣を持っている。見た目は剣士か騎士といったところだ。この辺りは現行のゲームと変わらない。彼は受け取ったリストの先頭に書いてあるモンスターレベルを確認する。そのレベルに合わせて装備を変更して自室を出た。すると、自室を出た先には青く四角い部屋がある。その中央には今回テストされるモンスター。ここはテスト用のフィールドである。

「さてと、始めますか。」

ケイトは剣を構え、モンスターへと向かう。孤独な戦闘の始まりだ。

菅谷は順調にリストの各モンスターを確認しながら倒していった。倒せないという事は無い。代わりに倒すまでの攻撃回数が重要になる。攻撃の回数から今のレベルに合っているかの確認をするのである。

菅谷は最後のモンスターを倒し終わるとケイトを自室に戻す。今回のテスト結果をまとめると大塚に提出する。それを終わると、今度は同じキャラクターを用いて現行のゲームにログインした。

ケイトは見回りを目的としているため、どのモンスターにも勝てる装備をしていく。ゲームマスターがゲーム内で倒されては笑いのものだ。自室から広場に入りしばらく歩くと、門番から通常フィールドへの転送を行ってもらう。このとき、コンピュータ側で操作することにより、転送先のレベルを変更できる。運営・開発だからこそ出来る事だ。とりあえずレベル1から順に入る。とは言っても、各レベルのフィールド数はおかしいくらいに多い。それにそのフィールドにプレイヤーが居るとは限らない。あまり意味のない行為のように思えるが、何かあったときに困るのでやらないよりはましである。ケイトは各レベル数フィールドずつ移動していく。低レベルはあまりよくは見えないが、高レベルのフィールドは良く見るようにしている。特にホワイトブラスタアが出現するレベル九以上のフィールド。ホワイトブラスタアを発見した上で、あまりにも沢山のプレイヤーを倒していた場合は自ら倒す事もある。そのモンスターがイレギュラーな存在に近いたためだ。何故このようなモンスターを加えたのか分からない。強力なモンスターが今もどこかに居るという緊張感が欲しいのだろうか。

ケイトはレベル七のフィールドに入り、幾つかのフィールドを見て回る。そして、砂漠のフィールドに入った時、そこでホワイトブラスタアを発見してしまった。初めはレベル七のため、似ているモンスターだろうと考えた。しかし、近づけば近づくほどホワイトブラスタアだと理解せざるを得なくなる。モンスターは一人のプレ

イヤーを追いかけている。レベルが合っているのならば二レベル差の相手である。そう簡単に倒せるものではない。追いかけていられるプレイヤーから叫び声が聞こえてくる。助けなければすぐに戦闘不能になるだろう。

ケイトは剣を抜くと、ホワイトブラスターに向かって走り出した。しかし、ホワイトブラスターの一際大きな咆哮の後、追いかけていたプレイヤーは戦闘不能になってしまう。

ケイトはすぐに残ったホワイトブラスターを倒した。このまま野放ししておく、さらに戦闘不能になるプレイヤーが増えると考えたためである。何故ホワイトブラスターがレベル七のフィールドに居るのか。そのことについて追いかけていたプレイヤーに聞くとしたが、既に強制帰還をしていた。一刻も早くその場から離れたいという気持ちはわかる。しかし、理由を聞けなかったのは残念である。

ケイトはそれから上位レベルのフィールドを順に見ていき、最高レベルのフィールドを確認するとフィールドを抜けて自室に帰還した。

菅谷はゲームをログアウトすると、ヘッドマウントディスプレイをデスクの上に置き、深呼吸をする。見上げた天井は妙に現実味を帯びていた。上に報告することは色々ありそうだ。

菅谷は大塚の前に立ち、先ほどゲーム内で起こったことを伝えた。それから、佐々木にも伝えてくると言って研究室を出ようとする。その彼を大塚が引き止める。佐々木は明後日に研究会があるために、発表準備で忙しいそうだ。

「今回の事は私たちで対処しよう。」

菅谷は大塚の言葉に頷くと、自分の席に戻って作業を再開した。

第十七話 伝え方

第十七話 伝え方

大学の大教室に大学関係者や企業の人間が集う。この部屋で研究会が行われているのだ。

前に出て発表していくのは、今まで自分たちがした研究。見ている側は発表について重箱の隅を突つつくような質問の嵐を発表者に浴びせる。質問が有益なものであっても、質問数が増えるほど自分の研究もしくは説明不足を疑いたくなる。

佐々木の発表についても質問がされた。ネットワーク上の掃除をしなくとも、従来のように自分だけを守れば良いのでは無いかという意見。無意味だと言われているようなものである。しかし、彼は落ち着いて回答した。現行システムの削除対象はネットワーク・トラフィックを著しく増加させるものではない。しかし、トラフィックを増加させる対象を削除対象に加えていけば、トラフィックの減少に有効であると答えた。他幾つかの質問を含め、質問者をどうにか納得させることに成功した。

佐々木は発表がすべて終り、懇談会の後列車に乗るために駅へと向かう。そこで、彼は荒谷に連絡を取ろうとしたが、すぐに止めた。すぐに伝えなければならぬ内容では無い。明日にでも伝えることにしよう。

佐々木は列車に乗って一度研究所に戻る。自分の研究室に入り、椅子に座ると大きいため息をついた。彼は椅子を座りなおすと、今日質問された内容を確認していく。あとはサポートから回された質問文を見ようとす。その時、手持ちの携帯電話が鳴った。作業を中断して電話をとる。

「佐々木君。今何処に居るんだい。」

電話の相手は大塚だった。声から何か何時もと違う気がした。

背後から聞こえてくる音も気になる。佐々木はそれらの考えを一旦横に置くと、自分が今研究室に居ることを伝えた。また、今回の研究会の収獲について伝えようとした。大塚はそれを制して、続けようとする。

「テレビやウェブでニュースを見て居ないのかい。」

大塚の口からそんな言葉が出るとは思わなかった。佐々木は話の変化に驚きつつ相槌を打つ。彼はすぐにウェブのニュースサイトを閉こうとする。

「荒谷君の所に娘さんが居るだろう。」

佐々木は表示されたトップ記事を見る。彼は相槌を打ちながらも嫌な予感がした。その中の一つの記事を開く。

「今日事件があつてね。その子も巻き込まれたんだ。」

大塚の言葉と目の前に開いた記事が重ね合わさる。佐々木はただ尋ねることしかできなかった。

事件は今日の午後五時ごろ。荒谷の住む地域の駅前で起こった。俗に言う通り魔だそうだ。男が駅前の人通りに突っ込み、刃物を振り回したらしい。人通りが多かったためか負傷者も多く、中には死者も出た。その中の一人が荒谷の所の娘さんだそうだ。彼女は荒谷の奥さんと一緒に駅前で買い物をしている途中だったらしい。そこで事件が起きた。記事によると、犯人は自分の人生と周りの環境に嫌気が差して行動したらしい。何かを変えるために行動したなら良かった。しかし、そうで無いのが残念だ。犯人は事件前にあるインターネット掲示板に犯行予告をしていたようだ。警察は犯行予告自体は住民から通報で把握出来たらしい。しかし、書き込みから行動に移すまでの速さに対応できなかったようだ。やはり、無数にある掲示板の何処に危ない内容が書き込まれてもすぐに分かるようにするにはまだ時間がかかりそうだ。かなり前にも同じような事件があつて、お役所が頑張つて感知ソフトを作ろうとしたらしいが、今だ世に出ていない。考えてすぐに出来るのなら、今回のような事件も

起きなかつただろう。

佐々木は妻と共に斎場に着いた。息子は母方の両親に預けた。周りは黒の礼服を着ている人々。それ以外に人間じゃない人間も居たが気にしないことにした。言い出したらそれをネタにしてくるような奴らだ。本当は故人のためにも静かにしておいて欲しい。正直気分の良い物では無い。

受付をして中に入る。周りを見ればほとんどが面識の無い人々だ。ただ、その中にも見慣れた顔があつた。研究所の仲間たちだ。近付いてみるが、大塚は見当たらない。大塚の部下である菅谷の話では、荒谷の所に行っているようだ。佐々木たちも荒谷の所に行くことにした。

荒谷は泣き崩れていた。その体を大塚が支えている。佐々木は進みより、荒谷を抱きしめる。そして、小さな声で伝える。お悔やみの言葉、そして彼を元氣付ける言葉を。荒谷はそれを聞くとゆっくりと立ち上がる。

「大丈夫だ。ありがとう。」

荒谷は歩き出すが足元がおぼつかない。またすぐに倒れそうだが娘が死んだのだ。無理も無い。自分の子供が死んだとして、平気な顔でいられる親なんて居ないだろう。

通夜の流れをすべて終え、親族だけが残る。佐々木たちも研究所の仲間も帰宅した。

佐々木は次の日の葬式にも息子は預けたまま行つた。受付をして着席する。中には学生服の子達もいた。荒谷の娘さんと同じ学校の子だろう。僧侶の読経と焼香。弔辞奉読の後、彼らは焼香をしていく。

棺に入れられる生花。蓋をして棺に釘打ちをしていく。霊柩車への道。荒谷を先頭に歩き出す。涙を堪える姿が心に痛い。故人と親しかつただろう女子生徒たちが泣いている。

棺が霊柩車に載せられると喪主である荒谷が挨拶をする。これ

から火葬場に向かう。佐々木も火葬場へ向かおうと考えていた。故人と親しかつたかについては少々怪しいが、それ以上に荒谷自身が心配だった。彼の言葉に荒谷たちも了承してくれた。

火葬場へ向かい、骨になるまで待つ。その時間がどうしようもなく辛い。周りの空気も重い。葬式とは重苦しいものだが、それ以上に重い気がした。相手が相手だからだと思う。

立ち上る煙、拾い上げる骨と化した少女。入れる骨壺。大きな体が、今では小さな骨壺の中に納まってしまっている。

佐々木たちはそのまま斎場に戻り、事を済ませるとそれぞれが帰宅する。

帰宅すると玄関にて塩で身を清める。塩を投げつける息子は楽しそうだ。この行為が意味することをあと数年たったらわかるかもしれない。

佐々木は家の中に入り、風呂に入るとソファにもたれかかる。そして、大きく息を吐いた。隣で息子がテレビをつける。しかし、彼は見ない。

テレビなんて見たくない。そう、見たくないんだ。

最終話 ネットワークレジスタンス

最終話 ネットワークレジスタンス

佐々木は荒谷の研究室に入る。荒谷が久しぶりに来ていると警備員から聞いたからだ。挨拶をしながら室内に入るも、荒谷は反応せず研究に没頭している。何かを紙に書いているようだが、ここからは分からない。その姿は彼から見ると何時もと違うように思えた。彼は励ましながら近づくと、荒谷は急に顔を上げた。しかし、彼を見ずにディスプレイを見ている。

「そうだ。消えたらもう一度作れば良いんだ。そうだよ。」

荒谷は天井を見上げ、ひとりで笑い出す。荒谷には佐々木が目映っていないようだ。彼は荒谷の行動と言葉に説明し難い恐怖を覚え、その場から後退する。そのまま、荒谷の研究室を出た。そして、ドアにもたれかかる。聞いてはいけないことを聞いてしまった感覚である。彼はこれ以降自分から荒谷の研究室へ行く事は無くなった。

佐々木は自分の研究室に入り、サポートに届いた質問を見ていく。すると、気になるものが幾つか出てきた。内容は、モンスターが倒せないという内容。その質問が何通もあり、どれも同じモンスターを指しているようだ。彼はすぐに大塚のほうに質問を送り、自らも向かう。

大塚の研究室。大塚はディスプレイに写された質問文を呼んでいる。その傍には佐々木とテストをした菅谷の二人がいる。

「倒せないなんて。きちんとテストしたはずなんだがね。」

大塚は菅谷を見る。菅谷はすぐに反応する。彼の話ではテスト時には特に異常は無かったそうだ。だとすると、ゲーム内に放たれ

てから変化したのだろうか。

「とにかく、該当モンスターの除外と原因を突き止めなければならぬ。」

大塚の言葉ですぐに該当モンスターがゲームから除外される。ユーザーには「プログラムの不具合のため対象モンスターの一時的な除外をする」ことが告げられた。

対象モンスターがゲーム内から除外されると、再度モンスターのテストを開始する。テストをする菅谷を後ろから見る佐々木。

テスト用フィールドに放たれたモンスターは菅谷の操作するプレイヤーを見つけるとまっすぐに向かってきた。

そこからしばらくは戦闘シーンである。ガードと隙を突く攻撃のやり取り。さすがテストプレイヤーだけあって動きに無駄が無い。やりこんでいる感がある。しかし、なかなか倒れない、倒されない。見ている限り押しているのは菅谷の操作するプレイヤーだ。

「そろそろ倒せてもいいんだけど。」
菅谷は操作しながら呟く。佐々木もこれほど長く戦う相手では無いと思った。明らかにおかしい。

「ちよつと貸してくれ。」

佐々木は隣のコンピュータを操作している研究員をどけて操作し始めた。すぐにテスト領域に入る。開発当初のテスト環境がベースであったために容易に操作できた。テスト中の菅谷のプレイヤーと相手モンスターを解析する。彼は画面に流れ出すコードの数々をじつと目を凝らして見る。途中で菅谷が話しかけてきたが、ゲームに集中しろと言った。解析すれば何かあるはずだ。

菅谷は未だモンスターを倒せない。そろそろ戦闘を始めて十分になるだろう。そこで佐々木は流れるコードの中にたびたび出てくる文を見つけた。

「ガードだけで攻撃するな。」

佐々木は菅谷に命令する。この文が何なのか確かめなければならぬ。何をしたら出てくるものなのだろうか。菅谷が攻撃を止め

てからも一定間隔で何回か同じ文が出てきた。彼は攻撃とは関係ないようだと思う。そして、菅谷に再度攻撃を再開してもらおうとした時、流れるコードに変化が見えた。

「攻撃して無いよな。」

菅谷は攻撃していないと答える。佐々木はやはりと思った。流れるコードの中には注目すべき文は出てこなくなった。つまり、攻撃しなければいつか出てこなくなる文であるということだ。だとすれば、攻撃に係る文。彼は菅谷に攻撃を再開するように言う。再び、菅谷は攻撃を再開した。すると多数出てくる注目すべき文。

そこで佐々木はディスプレイから顔を離して考えた。攻撃すると発生する文。攻撃しなければ文は徐々に発生しなくなる。そして、相手モンスターは倒せない。三つの事象が彼の頭の中を回る。そして、考えられる一つの結論に至った。

「この文はモンスターの体力を回復しているのかもしれない。」

佐々木の言葉に菅谷は顔を彼のほうに向ける。しかし、菅谷はヘッドマウントディスプレイを被っているために正確な位置は把握できない。菅谷の言動もまだ現状を理解できていないようだ。

「このモンスターは自己修復型だ。解析で出てくる文によって自身の体を再生しているんだろう。だから、倒せないんだ。もういい、強制終了してくれ。」

佐々木の言葉で菅谷はテストプレイを終了する。佐々木は椅子にもたれかかり、天井を見る。

「こいつをまたゲームに戻すには、コードを解析して自己修復を無効化する必要がある。たった一種類のためにするのは面倒だぞ。」

佐々木は正直だった一種類の対象のためにコードを解析するのは割に合わないと思った。しかし、それと共に既に一度世に出してしまった以上、修正して再び送り出す義務があると考えた。それに一時的な除外とユーザーに言ってしまったっている。

「佐々木さん。やりましょう。」

佐々木は菅谷の言葉に起き上がる。彼は責任をもって解析しよ

うと思った。彼らはすぐに対象モンスターの解析を始めた。それと共に予定していた新種モンスターの投入を見送っていく。

佐々木たちはモンスターが吐き出すコードの山を記録する。そのコードを元に自動修復を無効化するコード作成に挑んだ。

ここはゲーム内の暗い遺跡。男女二人のプレイヤーがモンスターと戦っている。

「なんなのよ。なんで倒せないの。」

女プレイヤーがモンスターに斬りつけながら叫ぶ。男プレイヤーも攻撃しているが何度攻撃してもモンスターは疲れを知らずに襲ってくる。しばらくすると、他のモンスターたちが二人に寄ってくる。二人はそれぞれモンスターを攻撃しているが、集まってきたモンスターも同様に倒せない。別のフィールドに逃げてもモンスターが増えるだけで倒すことが出来ない。疲れ果てた二人をモンスター達は容赦なく攻撃する。二人は一体も倒せずに強制帰還となった。

佐々木たちは対象モンスターの除外後、何度か無効化プログラムを作成して試してみた。しかし、なかなか上手くいかない。プログラムを作っていくうちに、想像以上に手ごわい相手だと思うようになった。まるで、予想していたかのように無効化プログラムを無効化してくる。彼らは頭を抱えて悩んだ。どうすれば無効化出来るのだろうか。

次の日、佐々木は何時もの通りサポートプログラムから投げられた質問文に目を通し始めた。すると、すぐに彼は自分の目を疑う文章を見つける。

内容は、先日除外したモンスター以外にも倒せないモンスターが出てきたというのだ。

佐々木は他の質問文を見ていくと同様の質問文がいくつも寄せ

られている事に気付く。文章から対象が複数のモンスターである事がわかった。彼は椅子にもたれかかり、手で顔を覆う。彼はひとりで笑い出していた。笑うしかなかったのだ。ひとしきり笑うと彼は質問文を大塚に送る。彼も同様に大塚の研究室に移動した。

大塚の研究室では今日もモンスターの解析をしている。佐々木はサポートの対応があるのでそれから参加するようになっていた。

「佐々木君。これは本当なのかね。」

大塚は驚き佐々木を見る。彼は静かに頷いた。

「モンスターからモンスターへ感染するとは気が付きませんでした。これではこのゲームも……。」

大塚は暗くなる佐々木の肩を叩き、彼の顔を上げさせる。

「サービス終了はしない。それではこれまで私たちがしてきたことがみんな水の泡となってしまっじゃないか。」

大塚は席を立ち、佐々木の隣に並ぶ。そして、室内に居る研究員たちを見た。研究員たちも大塚を見ている。

「現時点を持ってサービスを一時停止する。サイトとゲーム内にその旨を掲載してくれ。」

大塚は研究員たちに言う。彼らはそれぞれ頷き行動を始める。大塚はそれを確認すると、佐々木を見た。

「我々は早急に無効化プログラムを作成しよう。若いものだけに任せてられない。」

大塚の言葉に佐々木は頷く。そこへ菅谷が近づいてくる。

「除外されたモンスターの元のプログラムを駆除ソフトウェアに投げてみたところ、駆除することが出来ました。だとすると……。」

佐々木は菅谷の肩を叩き、それ以上言わないようにさせる。

「大丈夫だ。大塚さんと私に任せるんだ。」

菅谷は佐々木の言葉に頷き、作業に戻る。佐々木と大塚は菅谷や他の研究員から送ってもらったコードと元のプログラムから無効化プログラムの作成を始めた。勝てばサービス再開、負ければサービス終了の戦いだ。

サイトとゲーム内に掲示された内容から、プレイヤーたちは姿を消していく。失ったものを再び手に入れるには大変な労力が必要らしい。大変な、いや途方も無い労力が。

ここは大塚の研究室。佐々木と菅谷は二人並んでコンピュータの前に居る。それぞれの画面にはゲームのログイン画面。

そう、佐々木たちは無効化プログラムを完成させた。サイトに載せたサービス再開日は今日、時間もあと三十分ほどだ。

「いや、あえて私がやらなくてもいいだろう。」

佐々木は隣にいる菅谷に言う。彼はシステムを作ったが、ゲームは全く知らない。操作方法も良く分からないのだ。操作の上手いほかの研究員に任せたいほうが良い。

「駄目です。広場で今回の件について語ってもらっただけで良いですから。」

菅谷はそう言うと、ゲームにログインする。佐々木も仕方なくヘッドマウントディスプレイを被る。そして、事前に貰ったIDとパスワードを入力してログインした。キャラクターはすでに作成されていた。菅谷が事前に作成しておいたらしく、使ってくださいとのことだ。姿を一言で表すなら純白の騎士だ。装備しているマントが適度にゆれている。菅谷の話ではマントが運営の証らしい。

佐々木がキャラクターを選択するとプレイヤーの自室に転送される。菅谷の指示で装備品がある棚から指輪を見つけて装備した。この指輪自体が彼と大塚が作成したプログラムだということだ。システムに組み込む時間がなかったため、各プレイヤーの棚に配布したとの事である。

佐々木は指輪を装備すると、自室を出た。部屋の外に広がる広場。気が付けば隣に菅谷の操作するプレイヤーが居た。菅谷のキャラクターは黒い騎士。悪役に居そうなキャラクターだ。正義の味方には見えない。二人はゲート前に立つ。ここに居る門番から各フイ

ールドに転送されるらしい。菅谷を見れば、既にログインしているプレイヤーと話をしている。

開始時間が近づくと少しずつプレイヤーが増えてくる。それでも沢山とは言えない。佐々木たちと少々距離をとった位置にそれぞれグループごとに座っている。新しく来たプレイヤーたちに菅谷が話しかける。彼も歩き回りたかったが、菅谷から動かないようにと言われた。時間まで何も言わずに立っているということらしい。

さらにプレイヤーが増えてきたとき、菅谷が戻ってきた。そろそろ今回の件を話せということらしい。現実にいる佐々木は大きく深呼吸すると、広場に居る全員に話し始めた。

「みなさん。本日はこのゲームにお集まりいただきありがとうございます。私はこのゲームシステムの作成者の一人で佐々木と申します。隣に居るのは新しいモンスターを試すテストプレイヤーの菅谷です。」

そこで佐々木はプレイヤーを操作して歩き出す。立ったままですべて話すことに抵抗を覚えたからだ。そんなちよつとの隙にさつさと話せとせかすプレイヤーが出てきたが、さつさと話すので気にしない。佐々木は続ける。

「さて、今回の件ですが、その前に皆さんが戦っているモンスターが何なのかご存知ですか。」

そこで少し間を空ける。ここで答えが出てくるならそれで良いからだ。しかし、答えは出てこない。佐々木は続ける。

「そうですね、答えは皆さんご存知のコンピュータウイルスです。そう、みなさんはこのゲームでウイルスと戦っていたんです。何故コンピュータウイルスかについては話が逸れるのでここでは省略します。それと、コンピュータウイルスといってもゲームをするとき自分のコンピュータが感染するというわけではありません。ゲーム自体に駆除機能は付いていますし、みなさんのコンピュータにもウイルス駆除ソフトウェアがインストールされているでしょう。その点は心配ありません。しかし、その中で今回倒せないモンスターが発

生しました。しかも、複数の種類です。それはなぜか。」

佐々木は操作するプレイヤーを立ち止まれせ、広場に居るプレイヤーたちを見る。みんな黙って聞いている。

「それは、そのコンピュータウィルスのターゲットがこのゲームのメインシステムだったからです。」

広場から驚きの声上がる。佐々木自身も驚く事実だから仕方がない。それを隣に居る菅谷が沈める。そして彼に話を続けるように言う。

「除外した該当モンスターが目的としたのは、ゲーム内のシステムに感染を広めることだったんです。つまり、感染していたのはモンスターでは無く、モンスターを倒すみなさんだったんです。私も初めは信じられませんでした。モンスターたちではなく私たちが感染しているなんて。だから、モンスターを倒すシステムに感染したために、モンスターを倒せなくなっただんです。」

佐々木は首を振り、前を見る。起きたことは仕方が無いんだ。「私たちはシステムから感染部分を除こうとしましたが、まだしばらく時間がかかります。そのため、現時点ではモンスターを倒せるように感染症状を無効化することにしました。」

佐々木の操作するプレイヤーは腕を挙げ指にはめた指輪をプレイヤーたちに見せる。

「これが、モンスターを倒せないという症状を無効化する「希望の指輪」です。みなさんの部屋の装備品がおかれてる棚に置いておきました。持っていないという方が居ましたら、雑貨屋にて配布していますので受け取って必ず装備してください。」

佐々木は腕を降ろして、プレイヤーたちを見回す。ここに居る戦士たちが、このゲームを支えているんだ。

「最後に、本日はお集まりいただきありがとうございます。これからもネットワークレジスタンスをよろしく願います。」

佐々木の操作するプレイヤーは深々とお辞儀をした。頭を上げたとき、プレイヤーたちがゲートに近づいてきた。

「早速行かせてもらっせ。」

ハンマーを持った男たちが佐々木の操作するプレイヤーに近づいてくる。そこへ菅谷が入ってきた。

「ここからは私に任せてください。」

菅谷の言葉で、佐々木はプレイヤーを門番から少し離れた場所に移動させた。立っているのもつまらないと現実の菅谷に言うと、座り方を教えてもらった。彼の操作するプレイヤーは座り、菅谷が門番前でプレイヤーたちが指輪を装備しているか確認していくさまを見た。次々とフィールドに転送されていくプレイヤーたち。広場からプレイヤーが消えていく。

「あの。ちよつと良いですか。」

佐々木はゲーム内の声にプレイヤーを操作して声のしたほうを見た。そこには少女キャラ二人組が居た。見るからに簡素な装備と武器だ。佐々木は操作するプレイヤーを立たせる。そして、どうしたのかと聞いた。

「まだ、私たち始めたばかりで。大丈夫なんでしょうか。」

不安そうに佐々木を見る。佐々木は頷き、門番を見た。そこにはフィールドに向かうプレイヤーたちが居る。それを確認すると、二人組を見た。

「無理せず、先輩たちに任せたほうが良い。」

佐々木の言葉に二人組はそれぞれ頷くとどこかへ行ってしまった。

佐々木はプレイヤーを操作してしばらく広場を見回したが、特にすることも無くなってしまった。彼は菅谷にログアウトすると伝える。菅谷が了承すると、彼は自室からログアウトした。ヘッドマウントディスプレイを置いて席を立つ。大塚に自分の研究室に戻ると伝えて大塚の研究室を出る。

佐々木は自分の研究室に入り、アイスコピーを作つて胃に流し込む。空のコップをテーブルに置くと、コンピュータを操作し始めた。サーバーにアクセスして情報を取得する。再開して間もない

が、既に幾つか削除しているようだ。

そこへ、ドアをノックする音が聞こえる。佐々木が返事をする
と、現れたのは荒谷だった。久しぶりに会った荒谷は少々頬がこけ
ていた。

「ゲームを再開したそうだな。援軍を送っておいた。まあ、頑張っ
てくれ。」

荒谷はそれだけ言うと、ドアを閉めて出て行った。「援軍」とい
う言葉に反応してすぐにドアを開けて荒谷を探したが、既に自分の
研究室に戻ったようだった。

「援軍か、援軍ね。」

佐々木はコンピュータの前に座り、ゲームが動いているサーバー
からゲームに接続しているアドレスを引っ張り出した。順にアドレ
スを見ていくと見たことのあるアドレス郡を発見する。

「まさか、身内からか。」

そこには荒谷の研究室から接続されているアドレスが表示されて
いた。しかも、一つではなく複数である。一つならば荒谷だけであ
るが、複数ということは。

佐々木はこの事からある結論に至る。彼はその内容からか無意
識に笑い出していた。笑いながらも目の前にある現実を否定しよう
と首を横に振る。

「まさか、まさかな。そんなの出来るわけ無いだろ。」

しかし、複数のアドレスとそこから見える情報が佐々木に現実
を突きつける。

世界とは本当に広いものなのだ。それを忘れてはならない。

この「ネットワークレジスタンス」は一つの世界だ。プレイヤー
は世代も人種も生きている場所も違う。戦う理由もそれぞれだろ
う。しかし、ネットワークを介して自分たちの脅威へ抵抗する点は
同じだ。

何時だって、何処にでもあるんだ。

彼らの「ネットワークレジスタンス」が。

ネットワークレジスタンス 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9570f/>

ネットワークレジスタンス

2011年5月29日21時05分発行